

# 那珂 45

—那珂遺跡群第100・108次調査報告—

2007

福岡市教育委員会



NA KA  
那珂 45

—那珂遺跡群第100・108次調査報告—



遺跡略号 NAK  
調査番号 0425(100次)  
0490(108次)

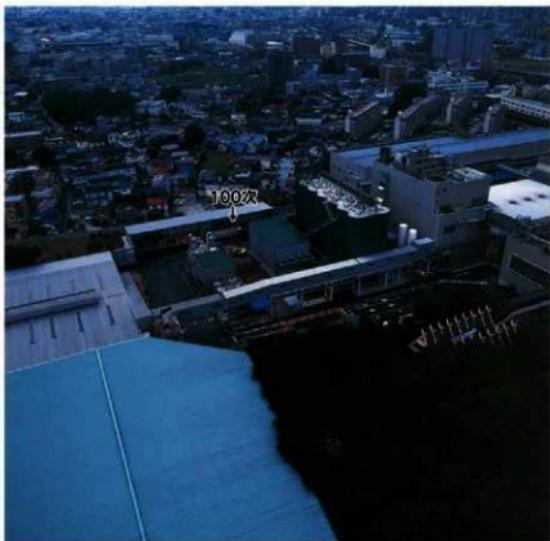
2007

福岡市教育委員会





卷頭写真1 調査地点遠景（上空から：中央は東光寺剣塚古墳）



卷頭写真2 第100次調査 調査地点遠景（北から：手前は東光寺剣塚古墳、奥が那珂八幡古墳）





卷頭写真3 第100次調査 調査区南側全景（北西から）



卷頭写真4 第100次調査 調査区中央部全景（北西から）



## 序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な努めであります。

福岡市教育委員会では開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財については事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

今回報告する那珂遺跡群第100次及び108次調査においても発掘調査により多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまでアサヒビル株式会社博多工場をはじめとする関係各位のご理解を賜り、ご協力をいただきましたことに対し厚く御礼申し上げます。

平成19年3月30日

福岡市教育委員会  
教育長 植木 とみ子

## 例　言

1. 本書は福岡市教育委員会が平成16年度に博多区竹下3丁目1番1号 アサヒビル株式会社博多工場内において実施した那珂遺跡群第100次・108次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測は長家伸、藤野雅基が行った。
3. 遺物の実測は長家、林田憲三、井上篤、西江幸子が行った。
4. 製図は長家、撫養久美子が行なった。
5. 写真は長家、林田、井上が撮影した。
6. 本書で用いる方位は磁北であり、座標北から6° 西偏し、真北から6° 18' 西偏する。また座標は特に記さない限り日本測地系を使用している。
7. 本書で用いる遺構番号は通し番号にし（一部欠番あり）、報告の際には遺構の性格を示す略号を付して表記している。略号は斐棺（K）、上坑墓・上坑（SK）、溝（SD）、ピット（SP）である。
8. 本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので、活用いただきたい。
9. 本書の編集・執筆は長家が行った。

遺跡調査番号	0425		遺跡略号	NAK-100	
所 在 地	博多区竹下3丁目1-1			分布地図番号	37-0085
開 発 面 積	560m <sup>2</sup>	調査対象面積	560m <sup>2</sup>	調 査 面 積	447m <sup>2</sup>
調 査 期 間	平成16年6月1日～平成16年7月30日		事前審査番号	15-2-1013	

遺跡調査番号	0490		遺跡略号	NAK-108	
所 在 地	博多区竹下3丁目1-1			分布地図番号	37-0085
開 発 面 積	1800m <sup>2</sup>	調査対象面積	1800m <sup>2</sup>	調 査 面 積	454m <sup>2</sup>
調 査 期 間	平成17年3月8日～平成17年3月18日		事前審査番号	16-2-519	

## 本文目次

### 那珂遺跡群第100次調査報告

I はじめに	
1 調査にいたる経過	1
2 調査体制	1
II 調査の記録	
1 遺跡の立地とこれまでの調査	5
2 調査の経過	5
3 遺構と遺物	6
1) 墓塚墓	6
2) 土坑墓・土坑	37
3) 溝	43

### 那珂遺跡群第108次調査報告

I はじめに	
1 調査にいたる経過	62
2 調査体制	62
II 調査の記録	
1 調査の経過	63
2 遺構と遺物	63
1) 出土遺物	63
2) 小結	63

## 挿図目次

第1図 調査区位置図 1 (1/50,000)	2
第2図 調査区位置図2 (1/3,000)	3
第3図 調査区全体図 (1/150)	4
第4図 K004・006及び出土遺物実測図 (1/20、1/8)	7
第5図 K007及び出土遺物実測図 (1/20、1/8)	8
第6図 K008・009及び出土遺物実測図 (1/20、1/8)	9
第7図 K010・011及び出土遺物実測図 (1/20、1/8)	11
第8図 K012・014及び出土遺物実測図 (1/20、1/8)	12
第9図 K015及び出土遺物実測図 (1/20、1/8)	13
第10図 K016・022及び出土遺物実測図 (1/20、1/8)	14
第11図 K023及び出土遺物実測図 (1/20、1/8)	16
第12図 K026・027及び出土遺物実測図 (1/20、1/8)	18
第13図 K028・029及び出土遺物実測図 (1/20、1/8)	19
第14図 K030・031及び出土遺物実測図 (1/20、1/8)	21
第15図 K032・033・035実測図 (1/20)	22
第16図 K032・033・035出土遺物実測図 (1/8)	23
第17図 K036及び出土遺物実測図 (1/20、1/8)	24
第18図 K037及び出土遺物実測図 (1/20、1/8)	26
第19図 K039・040及び出土遺物実測図 (1/20、1/8)	27
第20図 K041・042及び出土遺物実測図 (1/20、1/8)	28
第21図 K043・044及び出土遺物実測図 (1/20、1/8)	29
第22図 K046・047及び出土遺物実測図 (1/20、1/8)	31
第23図 K048及び出土遺物実測図 (1/20、1/8)	32
第24図 K049及び出土遺物実測図 (1/20、1/8)	33
第25図 K050・056及び出土遺物実測図 (1/20、1/8)	35
第26図 K057・058・059及び出土遺物実測図 (1/20、1/8)	36
第27図 S K005・013・017・018実測図 (1/30)	37
第28図 S K019及び出土遺物実測図 (1/40、1/3)	38
第29図 S K021・025・034・038実測図 (1/30)	40
第30図 S K045・063及び出土遺物実測図 (1/30、1/3)	41
第31図 S D001・002土層図及び出土遺物実測図 (1/30、1/3)	42
第32図 S D003・024断面図及び出土遺物実測図 (1/30、1/3)	43
第33図 調査区全体図 (1/200、1/50)	64
第34図 出土遺物実測図 (1/3)	65

## 写真目次

卷頭写真1 調査地点遠景 (上空から：中央は東光寺剣塚古墳)	写真35 K044 (東から) ..... 52
卷頭写真2 第100次調査 調査地区遠景 (北から：手前は東光寺剣塚古墳、 奥か那珂八幡古墳)	写真36 K046 (西から) ..... 52
卷頭写真3 第100次調査 調査区南側全景 (北西から)	写真37 K047 (北から) ..... 52
卷頭写真4 第100次調査 調査区中央部全景 (北西から)	写真38 K048 (北から) ..... 52
	写真39 K049 (北から) ..... 52
	写真40 K050 (東から) ..... 52
	写真41 K056 (北から) ..... 53
	写真42 K057 (東から) ..... 53
	写真43 K058 (北から) ..... 53
	写真44 K059 (北から) ..... 53
	写真45 S K017・018 (西から) ..... 53
第100次調査	写真46 S K018土層 ..... 53
写真1 調査地点より南東方向を望む (中央は那珂八幡古墳)	写真47 S K019 (北から) ..... 54
写真2 調査区南側全景 (北西から) ..... 45	写真48 S K019 (東から) ..... 54
写真3 調査区中央部全景 (北西から) ..... 46	写真49 S K019土層1 ..... 54
写真4 調査区南側全景 (北西から) ..... 46	写真50 S K019土層2 ..... 54
写真5 K004 (北から) ..... 47	写真51 S K025 (北から) ..... 54
写真6 K006 (北から) ..... 47	写真52 S K034 (西から) ..... 54
写真7 K007 (南から) ..... 47	写真53 S K038 (北西から) ..... 55
写真8 K008 (東から) ..... 47	写真54 S K038土層 ..... 55
写真9 K009 (南から) ..... 47	写真55 S K045 (南東から) ..... 55
写真10 K010 (南から) ..... 47	写真56 S K063 (東から) ..... 55
写真11 K011 (西から) ..... 48	写真57 S D001 (西から) ..... 55
写真12 K012 (南から) ..... 48	写真58 S D001土層 ..... 55
写真13 K014 (南から) ..... 48	写真59 S D002南半 (北西から) ..... 56
写真14 K015 (南から) ..... 48	写真60 S D002南半 (南東から) ..... 56
写真15 K016 (北から) ..... 48	写真61 S D002北側コーナー部 (西から) 56
写真16 K016内土層 ..... 48	写真62 S D002北側コーナー部 (東から) 56
写真17 K022 (西から) ..... 49	写真63 S D002土層1 ..... 56
写真18 K023 (西から) ..... 49	写真64 S D002土層2 ..... 56
写真19 K026 (南から) ..... 49	写真65 S D003 (南東から) ..... 57
写真20 K027 (南から) ..... 49	写真66 S D003 (北西から) ..... 57
写真21 K028 (南から) ..... 49	写真67 S D003・K016 (北西から) ..... 57
写真22 K029 (南から) ..... 49	写真68 S D003内ピット状掘り方 (南から) ..... 57
写真23 K030 (南から) ..... 50	写真69 S D003土層 ..... 57
写真24 K031 (南から) ..... 50	写真70 S D024 (西から) ..... 57
写真25 K032 (南から) ..... 50	写真71 出土遺物1 ..... 58
写真26 K033 (南から) ..... 50	写真72 出土遺物2 ..... 59
写真27 K035 (西から) ..... 50	写真73 出土遺物3 ..... 60
写真28 K036 (東から) ..... 50	写真74 出土遺物4 ..... 61
写真29 K037 (南から) ..... 51	第108次調査
写真30 K039 (北から) ..... 51	写真75 調査区南側全景 (東から) ..... 66
写真31 K040 (東から) ..... 51	写真76 調査区北側全景 (南から) ..... 66
写真32 K041 (南西から) ..... 51	写真77 調査区南東隅土層 ..... 66
写真33 K042 (東から) ..... 51	
写真34 K043 (東から) ..... 51	

## 那珂遺跡群第100次調査報告

### I はじめに

#### 1 調査にいたる経過

平成16年2月16日付けでアサヒビル株式会社博多工場 工場長 秀島教文氏より福岡市教育委員会宛に福岡市博多区竹下3丁目1-1 アサヒビル株式会社博多工場内における、省エネルギー施設等建設にかかる埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（事前審査番号15-2-1013）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群（分布地図番号37-0085・遺跡略号NAK）に含まれている。更に調査対象地点東側隣接地では1988年に第16次調査が行われ、斎棺墓群が確認されている地点である。また本申請地は現麦芽受け入れ棟増築工事（事前審査番号15-2-821）に伴い既に試掘調査済みであり、GL-80cmの鳥居ローム層上面で斎棺墓が確認されていた。

この結果を受けて埋蔵文化財課では申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取り扱いについて協議を行った。協議の結果、建物の構造上遺構の破壊が避けられないため、平成16年度に発掘調査、平成17年度に資料整理・報告書作成を行い、記録保存を図ることで協議が成立したが、資料整理・報告書作成は18年度に譲越とした。

調査期間は平成16年6月1日～平成16年7月30日である（調査番号0425）。調査面積は447m<sup>2</sup>、遺物はコンテナ70箱分出土している。

現地での発掘調査にあたってはアサヒビル株式会社博多工場関係の皆様から発掘調査についてご理解頂くと共に、多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

#### 2 調査体制

事業主体 アサヒビル株式会社博多工場

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課（現：埋蔵文化財第1課）

調査統括 平成16年度（発掘調査）

埋蔵文課財課長 山口謙治

調査第2係長 池崎謙二

平成18年度（整理・報告書作成）

埋蔵文化財第1課長 山口謙治

調査係長 山崎龍雄

調査庶務 平成16年度（発掘調査）

文化財整備課 御手洗清

平成18年度（整理・報告書作成）

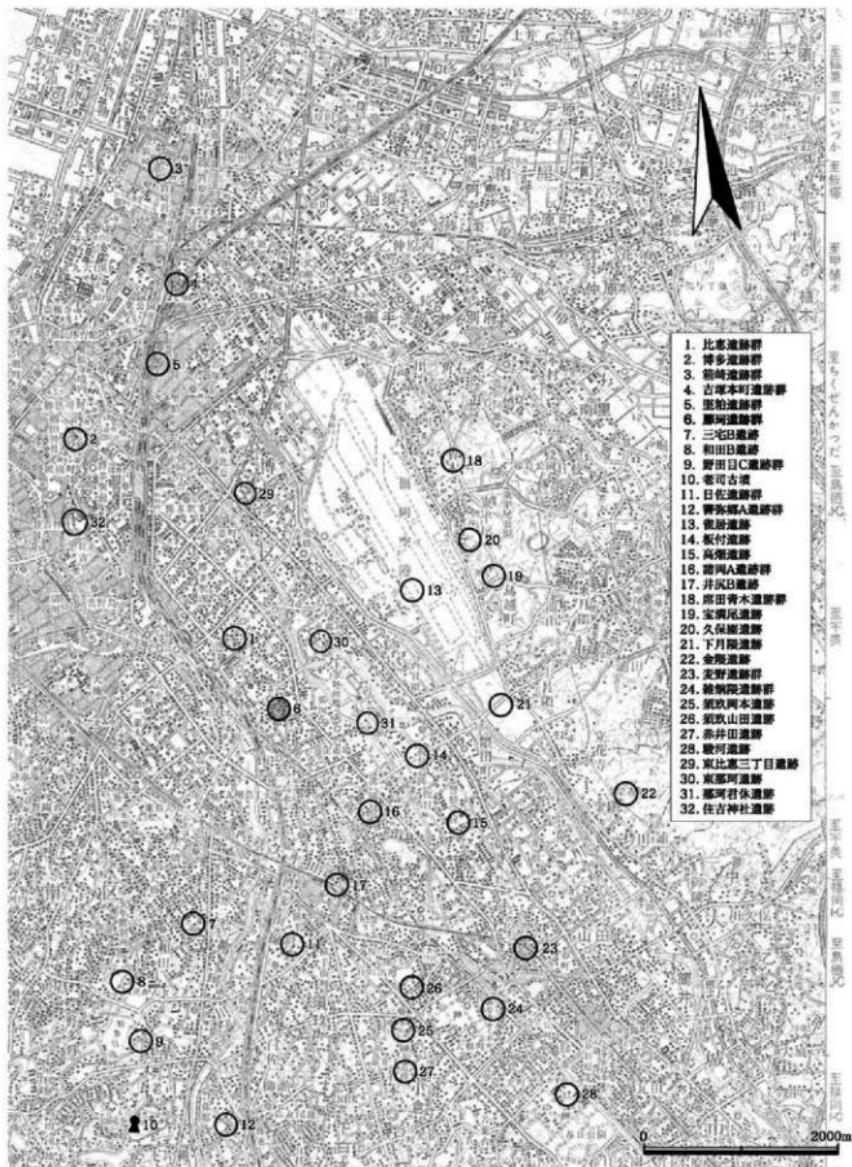
文化財管理課 鈴木由喜

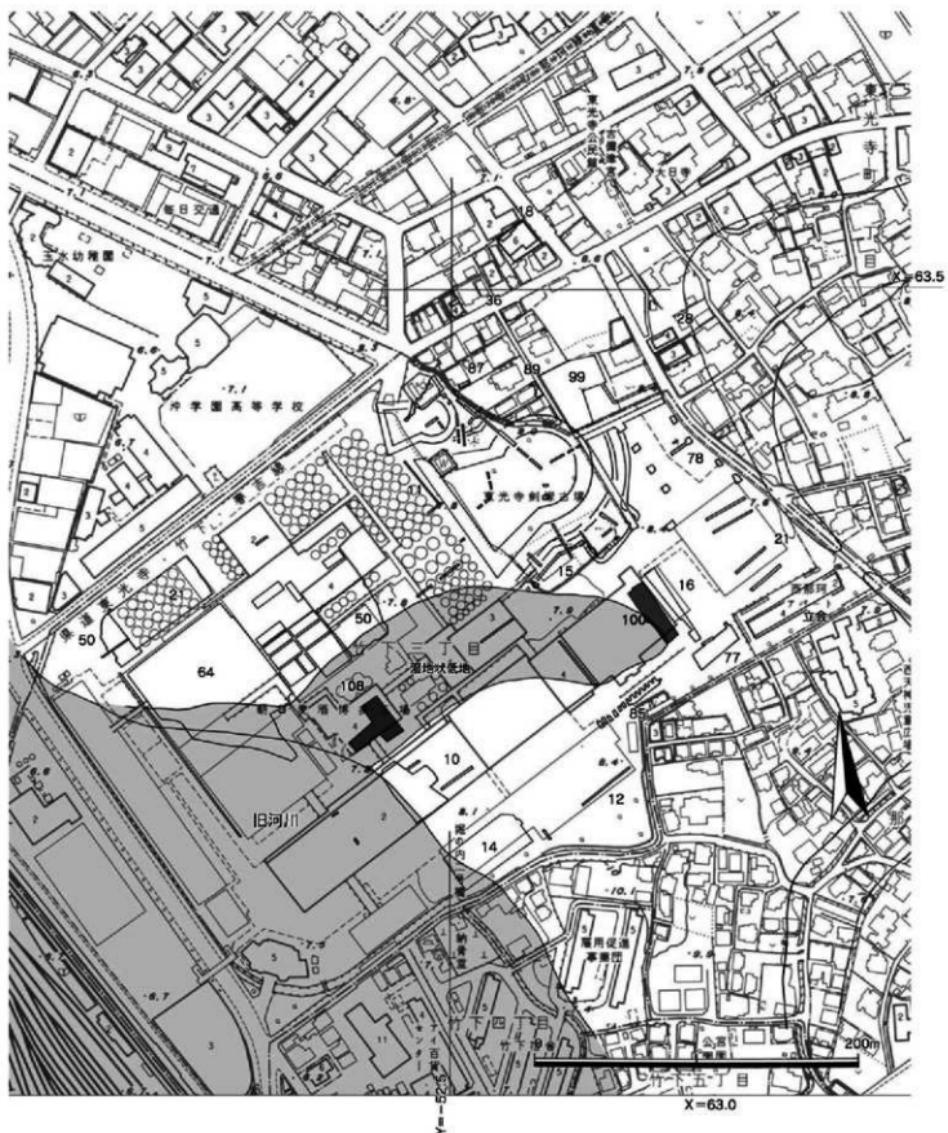
調査担当 埋蔵文化財課 調査第2係 長家伸

調査作業 澄川アキヨ 中村フミ子 岩本三重子 越智信孝 藤野トシ子 中村サツエ

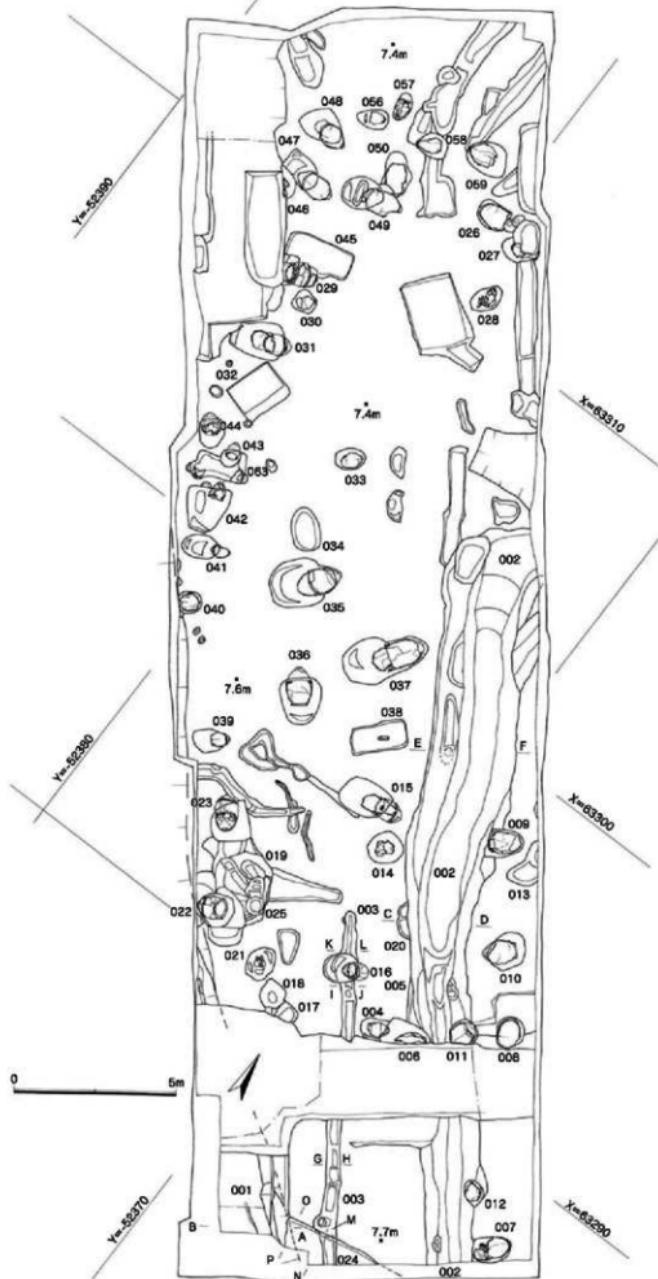
藤野幾志 西川シズ子 宮崎幸子 乗野季子 中島道夫 川下信弘 藤野雅基

整理作業 石谷香代子 太田次子 星野明子 樋口久子





第2図 調査区位置図2 (1/3000)



第3図 調査区全体図 (1 / 150)

## II 調査の記録

### 1 遺跡の立地とこれまでの調査

那珂遺跡群は福岡平野の中央部分を北流する那珂川と御笠川に挟まれた洪積丘陵上に立地する遺跡群である。丘陵の基盤層は花崗岩礫層で、この上面に阿蘇噴火火砕流・火山灰である八女粘土層・鳥栖ローム層・新期ローム層が堆積している。北側に隣接する比恵遺跡群とは一連の丘陵上の遺跡群を構成するものと考えられ、その範囲はあわせて南北2.4km、東西1kmに及ぶと考えられる。

今回の調査対象地はこの丘陵の中央部西側にあたる。この部分は大正10年（1921年）に現アサヒビル博多工場（敷地面積111,518.81m<sup>2</sup>）が建設されている。工場内では本書で報告する100次・108次調査を含め計15次にわたる発掘調査が行われ、調査総面積は23,309m<sup>2</sup>になっている。また工場内施設建築に伴う試掘調査も行われており、おおよそ敷地内の概要がつかめる状態となっている。ここでは今回の調査で主体となる弥生時代の遺構について、敷地を中心簡単にふれておきたい。

工場敷地西側の14・64次調査では那珂川を確認しており、これによって丘陵の西端が画されるものと考えられる。またこの河川につながる幅60mほどの湿地状を呈する低地が、10次調査地点と50・64次調査地点の間を東側に伸びている。本書により報告している108次調査地点はほぼ全体がこの低地部分に当たっている。この低地部は後世の造成により水田化がなされており、今回の100次調査SD001や64次調査日河川北側の切り落とし部分がこの造成面につながるものと考えられる。

ここでは、今回の調査の中心である弥生時代の遺構について概観しておきたい。弥生時代の遺構は工場内及びその周辺で濃密に確認されている。河川沿いの10次調査区では西側縁辺部で弥生時代前期及び中期の包含層、14次調査区では縁辺の包含層と共に後期の井戸4基、前期の貯蔵穴2基を検出している。100次調査に隣接する16次調査区では中期～後期初頭の甕棺墓35基、土坑墓・木棺墓14基、土坑1基、77次調査区では貯蔵穴・土坑を確認している。また低地部の北側に位置する15次調査区では東光寺剣塚古墳の南側で甕棺墓・土坑墓・木棺墓を検出し、北側では中期の竪穴住居跡を検出している。21次調査区では弥生時代前期の貯蔵穴13基、中期後半を主体とした甕棺墓28基、祭祀土坑2基を検出し区画墓の存在が想定されている。この他終末期以降の竪穴住居跡を検出している。21次に隣接する50次調査A区では前期の貯蔵穴6基、甕棺墓・土坑墓3基、祭祀土坑1基を検出し、B調査区では井戸8基を確認している。11次調査区では中期後半の井戸1基、64次調査区は前期貯蔵穴48基、中期以降は甕棺墓3基、井戸8基、竪穴住居跡2基、掘立柱建物1基。更に敷地外であるか89次調査で7基、99次調査で1基の甕棺墓を検出している。

以上のように旧地形の削平が進んでいるため、遺構の残存状態は不良ながらも、弥生時代全期を通じて遺構群が形成されていることが確認できる。中でも甕棺墓を中心とした中期～後期の埋葬遺構は明瞭な区画が想定される北西側の一群と、直線状に配されている尾根上的一群が確認されている。尾根上の一組は東光寺剣塚古墳の後円部先端を通り、全長200m程度にわたって広がる可能性があり、100次調査地点の甕棺墓はこの墓群の南端部分にあたるものと考えられる。

### 2 調査の経過

調査対象地は現状で未舗装の平地となり、標高は8.4m前後を測る。対象地は事前審査番号15-2-821による平成15年12月9日の試掘調査（現酵母乾燥室と原動機の間）の結果、今回申請地の西側隣接地（現麦芽受け入れ棟部分）では、急激な落ち込みを確認し、湿地状態であることが確認された。この湿地部分については落ち込みが人為的な傾斜を有し底面が平坦であることや、遺物がほと

んど含まれておらず、上層埋土にはガラスビン類が埋っていることなどから、自然の谷地形を近・現代に造成したものであると考えられ、慎重工事での許可が行われている。今回の申請地はその麦芽受け入れ棟と1988年に行われた第16次調査(現酵母乾燥室)の間に位置しており、前述の試掘調査の結果造成土を除去したGL-80cmの鳥栖ローム上面で甕棺墓を確認した部分である。

調査は重機による表土の除去から行った。この際調査廃土を場内処理する必要から当初南半部分の調査を行い、終了後土砂反転して北側部分の調査を行った。遺構面は鳥栖ローム層上面で標高は7.6m前後を測りほぼ平坦である。また遺構面は工場建設等により既に大きく削平を受けており、甕棺の多くが大きな削平を受けていた。なお第16次調査地点は調査当時、比較的削平を免れていた地点であり、今回の調査地点と比べて遺構面標高が1m前後高くなってしまっており、遺構の残りも良好であった。

検出遺構には甕棺39基、土坑墓・土坑11基、溝3条・ピット等がある。遺構の主体は弥生時代中期後半～後期初頭に位置付けられる甕棺墓・土坑墓等の弥生時代埋葬遺構であるが、この他弥生時代中期後半・7世紀後半～8世紀初頭・中世後半～近世の各時期の溝などを確認している。なお甕棺の残存状態からも、後世にかなりの削平が行われてきたものと考えられ、生活遺構に関わるピット等は極僅かしか認められず、その他の遺物も弥生時代中期後半の甕棺・丹塗り土器・日常土器及び須恵器等が少量出土するのみである。

### 3 遺構と遺物

#### 1) 甕棺墓 (K)

甕棺は弥生時代中期後半～後期初頭のものを39基確認している。隣接する16次調査地点では35基の甕棺墓・木棺墓・土坑墓14基、土坑1基が確認されており、周辺に大規模な埋葬遺構群が形成されていることが確認できる。今回の調査地点は尾根上に位置する埋葬遺構の南端部分にあたるものと考えられ、南側に位置する第77次調査区では埋葬遺構は確認されていない。

#### K004 (第4図、写真5・71)

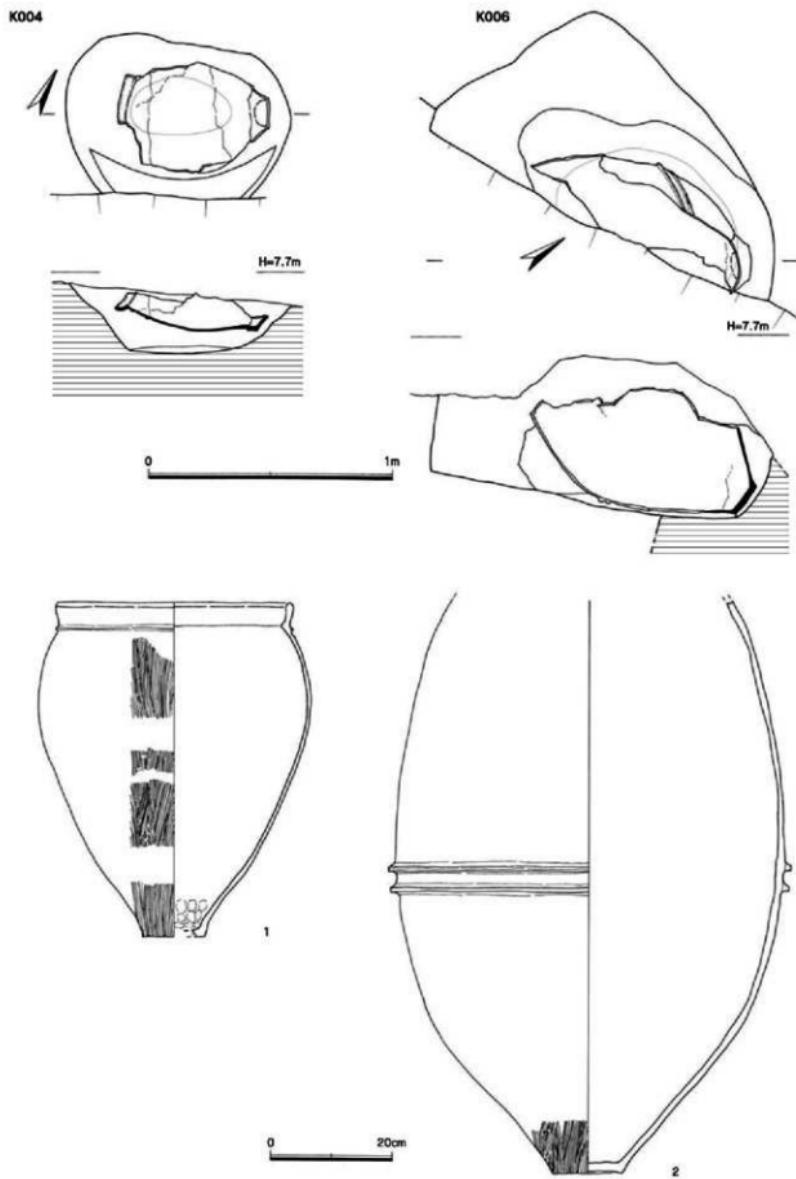
調査区南側で検出した小形棺である。主軸方向はN-61°-Eにとり、埋置角度は33°である。掘り方の南側を旧建物基礎によって削平されているが、切り合の関係よりS K005→K006→K004の関係となる。上面の削平のため2/3程を失っているが、単棺であると考えられる。掘り方は0.9×0.7m程度の長円形を呈し、断面形状は南側に平坦面を有する階段状の掘り方となっている。底面は0.4×0.25mを測り、平坦である。

出土遺物 (第4図 1) 全体の1/3程度が残存している。復元口径38.2cm、墨高55cm、復元底径10cmを測る。口縁部は内湾しながら立ち上がり、内面の届曲部は三角形に張り出しを有する。また頸部外面には断面三角形の突帯を貼り付けている。胴部最大径は44.8cmを測り、上部1/3ほど位置にある。調整は胴部外面全面に綴刷毛を行い、内面はナデ調査によって仕上げている。更に胴部外面中位には煤が付着している。

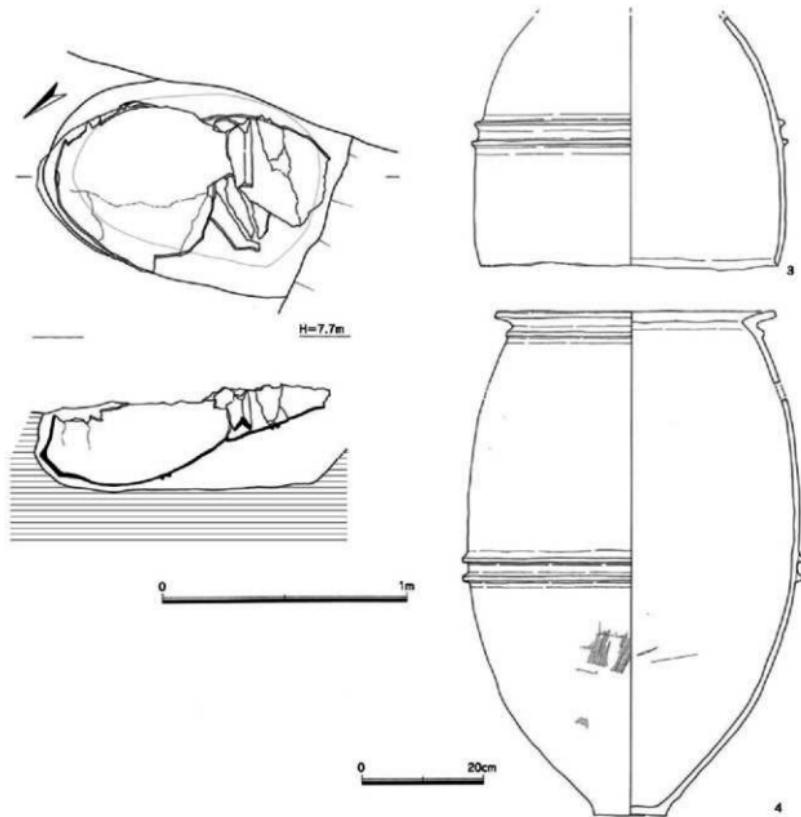
#### K006 (第4図、写真6・71)

調査区南側で検出した大型棺である。攪乱により大きく破壊されているが、崩落等による別個体の混入は認められず単棺と考えられる。主軸方向はN-33°-Eにとり、埋置角度は36°である。西側の掘り方上面をK004に切られ、南側は建物基礎による攪乱で欠失している。墓坑は現状で深さ60cmを測り、底面はほぼ平坦となっている。

出土遺物 (第4図 2) 口縁部付近を欠失し、全体の1/4程度が残存している。残存高94cm、底径11.4cmを測る。胴部最大径は66.6cmで、この部分に2条の断面コ字形の突帯を貼り付ける。器



第4図 K004・006及び出土遺物実測図 (1/20, 1/8)



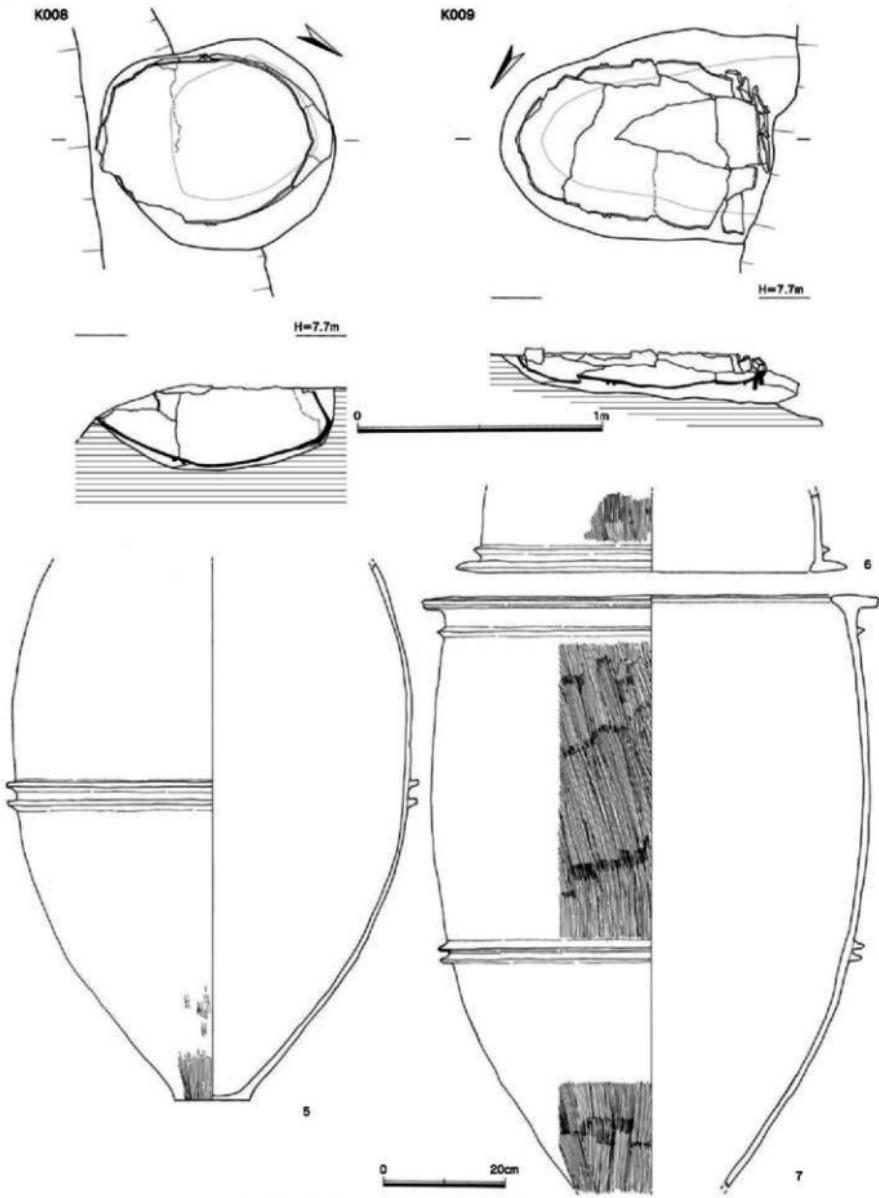
第5図 K007及び出土遺物実測図 (1/20, 1/8)

面の摩滅が進んでいるが、調整は胴部内外面共にナデ調整を行っており、外底面付近のみに縦刷毛が残されている。また胴部外面中位に径10cm弱の黒斑が残っている。

#### K007 (第5図、写真7・71)

調査区南端部で検出した覆口式の大形棺である。主軸方向はN—36°—Eにとり、埋置角度は32°である。上蓋には口縁部を打ち欠いた壺、下蓋に完形の壺を用いている。上面を削平されると共に西側をSD002によって削平されており、下蓋の1/2と上蓋の2/3を失っている。墓坑は現状で深さ40cmを測り、底面は平坦となっている。

**出土遺物 (第5図 3・4)** 3は口縁部～胴部上位を打ち欠いた上蓋である。胴部中位の1/3程度が残存している。復元胴部最大径は69cmでこのやや下位に2条の断面コ字形突帯を貼り付ける。



第6図 K008・009及<sub>レ</sub>出土遺物実測図 (1/20, 1/8)

器面の摩滅が進んでいるが、内外面共にナデ調整を行っており、外面には草木束状工具の痕跡が残る。

4は下蓋である。復元口径45cm、器高83cm。口縁部は上端面が内傾した逆L字状を呈する。また頸部直下に1条、胴部中位に2条の突帯を貼り付けている。胴部は下膨らみとなり、下半に幅2.5cm程度の小口痕跡と縱方向の刷毛目が部分的に残っているが、全体にナデ調整を行っている。内面にもナデ調整を行っているが、一部に小口痕跡が残っている。また口縁部内外面に黒色顔料の塗布が認められる。

#### K008 (第6図、写真8・71)

調査区南側で検出した大形棺である。南側を搅乱によって失っており、上蓋の存在は明らかでない。主軸方向はN-27°-Wにとり、埋置角度は24°である。削平が進んでおり、壺の口縁部も失われている。墓坑は現状で深さ35cmを測り、底面はほぼ平坦となっている。

出土遺物 (第6図 5) 口縁部を欠失し、残存高88.5cmを測る。胴部には2条の断面コ字形の突帯を貼り付けている。調整は内外面ナデを行っているが、外面下半には部分的に縦刷毛が残っている。また内面のナデも底部付近には板状工具の痕跡が残っている。

#### K009 (第6図、写真9・71)

調査区南側で検出した接口式の大形棺である。西側半分をSD002によって削平されている。主軸方向はN-53°-Eにとる。削平が進んでおり埋置角度は不明瞭であるが、口縁部の残存状態よりほぼ水平の埋置と考えられる。上蓋は鉢、下蓋は大形の壺であるが、上蓋は口縁部の一部を残すのみで大半は失われている。下蓋は墓坑底に接した部分が残るのみであり、2/3程は欠失している。墓坑は現状で深さ20cmを測り、底面は広い平坦面となっている。

出土遺物 (第6図 6・7) 6は上蓋の鉢である。口縁部の1/4程度が残存している。口縁部復元内径52cmを測り、口縁部は逆L字状に屈曲し、上面端部はやや外傾気味となる。頸部直下に断面三角形の突帯を貼り付け、胴部外面には縦刷毛を行っている。また胴部内面はナデによる。

7は底部を欠失し、全体の1/3が残る下蓋である。残存高97.4cm、復元口縁部内径59.4cmを測る。口縁部は上面端部が平坦な逆L字状となるが、内側への張り出しあるが残っている。胴部の張りは比較的緩く、最大径を上位に持つ砲弾形を呈する。突帯は頸部下に断面三角形を1条、胴部中位に断面長三角形のものを2条貼り付けている。調整は内面ナデ、外面は縦刷毛によるが、胴部突帯下では板状工具によるナデによって刷毛目をかき消している。

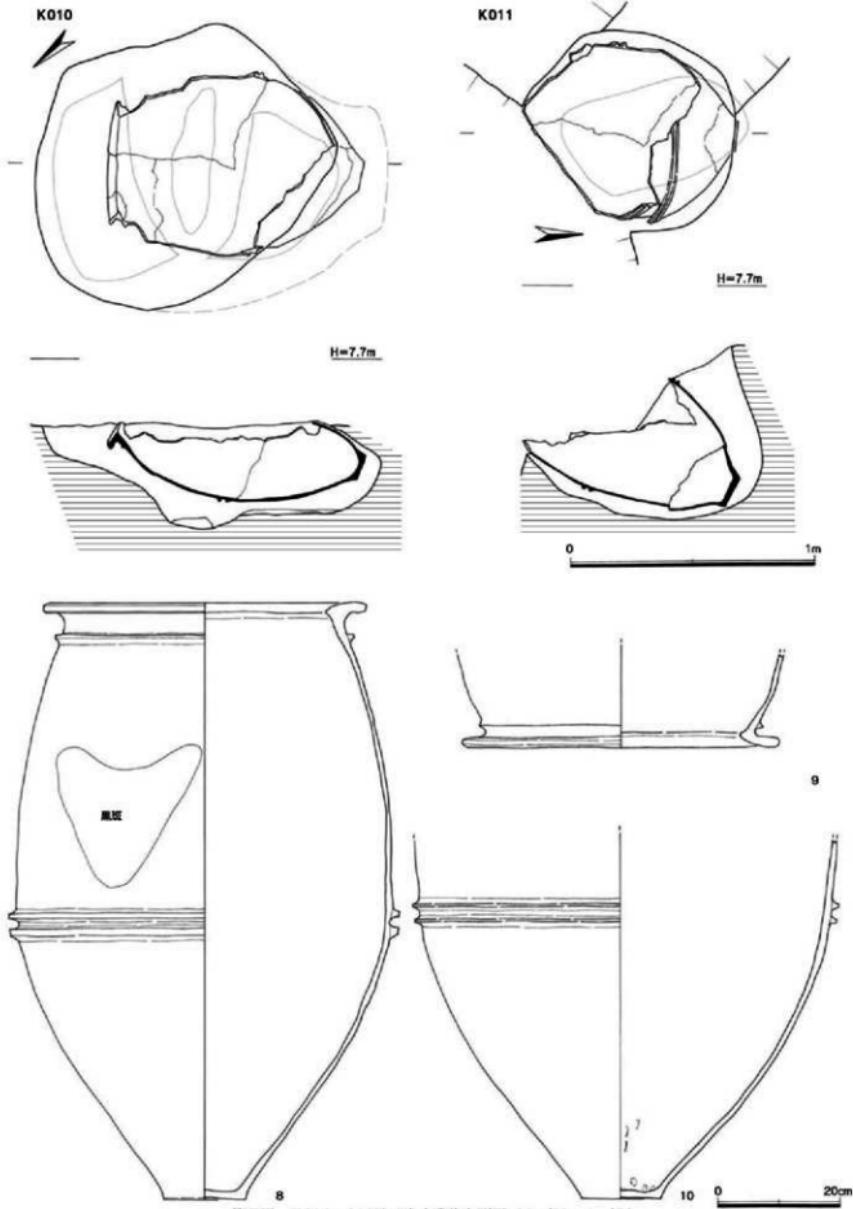
#### K010 (第7図、写真10・71)

調査区南側で検出した大形の単棺である。主軸方向はN-41°-Eにとり、埋置角度は13°である。壺は削平により1/3程を失っている。墓坑は現状で平面は1.2m×1.1mの不整な長方形形状を呈し深さは45cmを測る。底部付近は抉りこみを有しており、棺を差し込んだ状態となっている。また底面中央には幅50cm、深さ10cm程の掘り込みを有する。

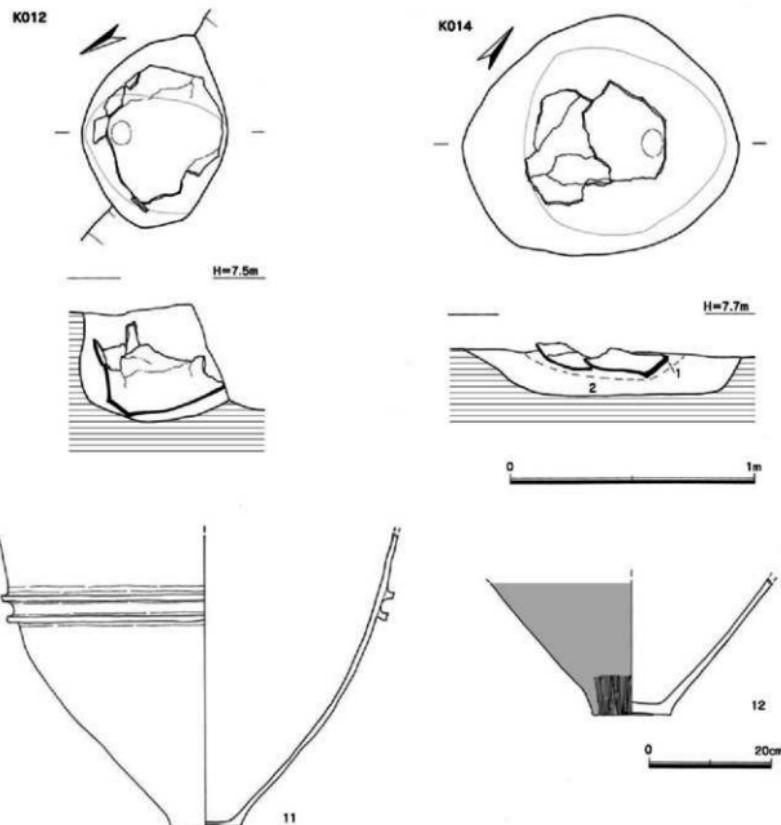
出土遺物 (第7図 8) 器高98.1cm、復元口径49.6cmを測る。口縁部は上面端部が僅かに内傾する逆L字状を呈する。胴部は中位に向かって大きく張り出し、頸部下に1条、中位に2条の断面コ字形突帯を貼り付けている。調整は内外面ナデにより、外面には2箇所に黒斑が認められる。

#### K011 (第7図、写真11・71)

調査区南側で検出した大形棺である。主軸方向はN-1°-Eにとり、埋置角度は27°である。南側の多くを搅乱によって失っているため、調査時点では上蓋の存在は不明であったが、整理作業時点では下蓋内に崩落していたと考えられる上蓋破片を確認している。また残存する下蓋も1/2ほどを失っている。墓坑は現状で深さ70cmを測り、北側がやや抉れた掘り方となっている。



第7図 K010・011及び出土遺物実測図 (1/20, 1/8)



第8図 K012・014及び出土遺物実測図 (1/20, 1/8)

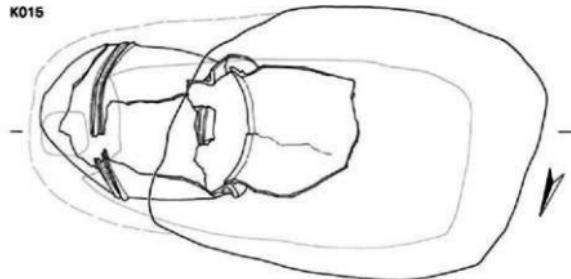
出土遺物 (第7図 9・10) 9は口縁部の完存する甕である。下甕とは別個体と考えられたためここでは上甕とした。口縁部は逆L字状に内傾し、頸部直下には断面三角形の突帯を貼り付けている。調整は内外面ナデによる。胎土は比較的精良で白色砂粒が多く含まれ、赤褐色を呈する。

10は下半の2/3のみが残存している。内外面は全体に丁寧なナデを行い、内底付近には小口痕跡が残っている。また胴部外面には2条の突帯を貼り付けている。色調は褐色を呈する。

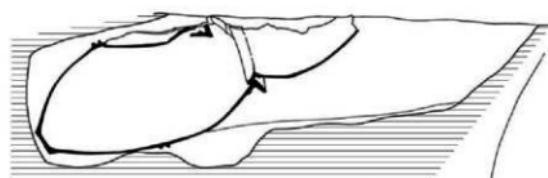
#### K012 (第8図、写真12・71)

調査区両側で検出した大形棺の下半部である。主軸方向はN—28°—Eにとり、埋置角度は54°である。大半をSD002によって削平されており、残存しているのは甕の下半部～底部のみである。墓坑は現状で深さ50cmを測る。

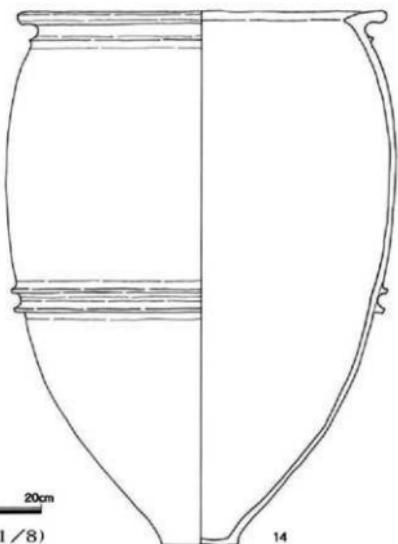
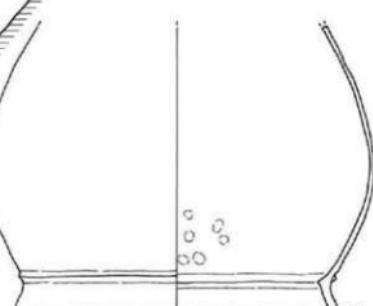
K015



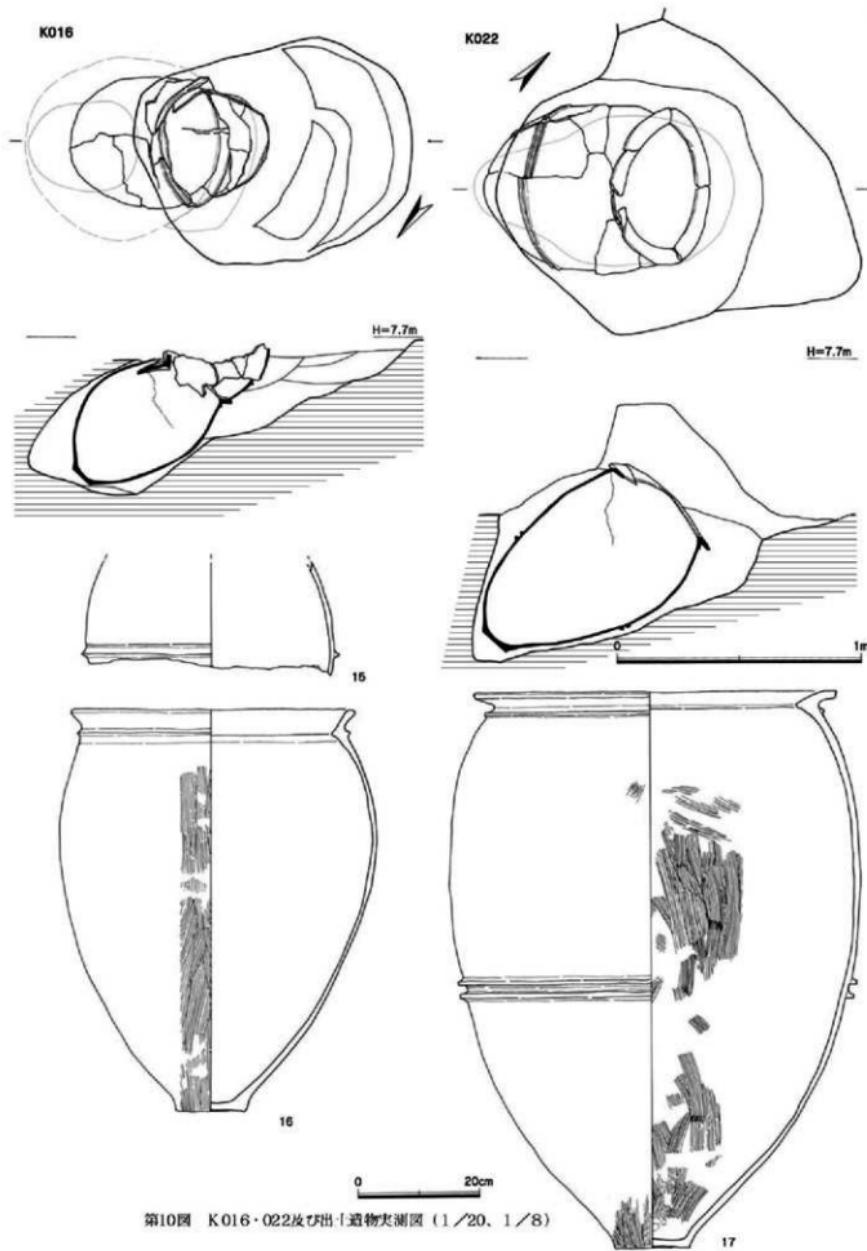
H=7.7m



0 1m



第9図 K015及び出土遺物実測図 (1/20, 1/8)



第10図 K016・022及び出土遺物実測図 (1/20, 1/8)

**出土遺物（第8図 11）** 下半部分のみ残存しており、残存高47.5cmを測る。調整は内外面丁寧なナデを行っている。胎土には径1~5mmの石英砂粒を多く含み、暗赤褐色を呈する。肩部の突帯は断面コ字形のものを2条貼り付ける。

**K014（第8図、写真13・71）**

調査区南側で検出した。主軸方向はN—52°—Eにとり、埋置角度は45°前後である。削平が進んでいるため底部を含めた一部分しか残存していない。墓坑は現状で径1~1.15mの略円形を呈し、深さは20cmである。掘り方は、墓坑掘削の後にぶい橙色土（2層）で埋め戻した上に黒褐色土（1層）により壺棺を埋めたものと考えられる。

**出土遺物（第8図 12）** 残存高22.5cm、底部径12.8cmを測る。調整は外底面付近に縦刷毛が残るが、それ以外は内外面ナデ調整を行う。また外面全体に黒色顔料の塗布が認められる。

**K015（第9図、写真14・72）**

調査区南側で検出した接口式壺棺である。検出時には上蓋がずれており、呑口状となっていた。主軸方向はN—69°—Eにとり、埋置角度は29°である。上蓋は削平により1/4が残存するのみである。下蓋の遺存状態は良好であり、略完形である。墓坑は現状で平面1.1m×1.5mの略長方形を呈し、深さ50cm前後を測る。掘り方は東側が大きく抉りこんでおり、下蓋を墓坑に挿入している。また底面は緩やかに傾斜しており、部分的に深さ15cm程度の掘り込みが見られる。

**出土遺物（第9図 13・14）** 13は口縁部～頸部は充存している。口縁部は「く」字状に屈曲し、屈曲部内面に張り出しを有する。調整は内外面ナデを行い、頸部直下には断面三角形の突帯を貼り付けている。胎土には1~2mmの砂粒を多く含み、赤褐色を呈する。

14は器高87.7cm、復元口径58.3cmを測る。口縁部は上面端部が内傾した逆L字状となり、頸部直下に1条、胴部中央に2条の突帯を貼り付けている。調整は内外面丁寧なナデを行うが、外面には胴部中央部を中心に草木束状の工具で縦方向になでつけたような痕跡が残っている。

**K016（第10図、写真15・72）**

調査区南側で検出した接口式の小形棺である。主軸方向はN—53°—Eにとり、埋置角度は43°である。上蓋は口縁部を打ち欠いて使用しており、下蓋はほぼ完形である。墓坑は現状で0.9×1.1mの平面略圓丸長方形を呈し、深さは60cmである。掘り方は、階段状に掘り下げられており、下蓋の挿入部分は40cmほど抉りこまれている。本壺棺はSD003を切っており、これに後出するものと考えられる。この溝は弥生時代終末～古墳時代初頭前後の遺構とされ、道路遺構をなす可能性も指摘される並列溝のひとつである。今回この溝を切る壺棺が存在することから、本調査区での溝の掘削・廃絶は弥生時代中期後半～後期初頭以前であると想定される。今後の検討課題としておきたい。

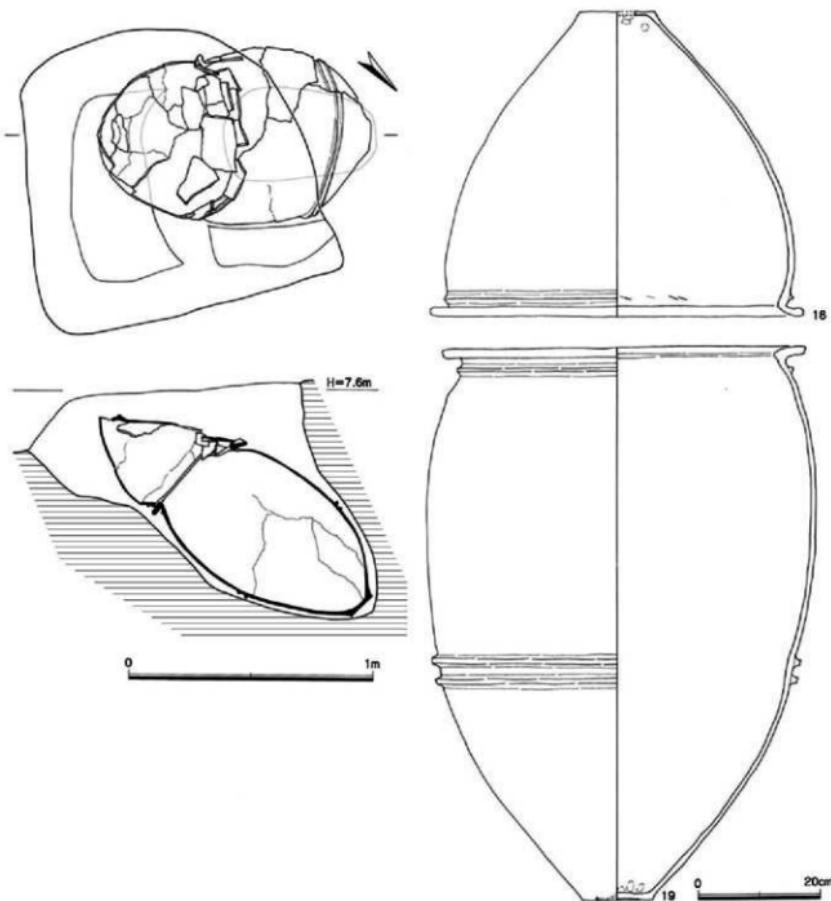
**出土遺物（第10図 15・16）** 15は突帯直上で打ち欠きを行った上蓋である。突帯は断面三角形のものが1条貼り付けられている。調整は内外面ナデによる。胎土は比較的精良で、明橙色を呈する。

16は器高66.4cm、口径45.5cmを測る。口縁部は「く」字状に屈曲し、屈曲部内面は張り出しを有する。また口縁部内面は僅かに内湾している。調整は内面丁寧なナデ、外面は全面に縦刷毛を行っている。また屈曲部外面上には断面三角形の突帯を1条貼り付ける。

**K022（第10図、写真17・72）**

調査区南側で検出した大形の單棺である。主軸方向はN—45°—Wにとり、埋置角度は42°である。不整形な掘り方を呈するSK019を掘り下げる段階で壺棺を確認した。掘り込みの前後関係は不明である。墓坑は階段状の掘り方を呈し、底面は壺棺の埋置方向に傾斜している。

**出土遺物（第10図 17）** ほぼ完形で器高91.7cmを測る。口縁部は上面端部が内傾した逆L字状



第11図 K023及び出土遺物実測図 (1/20, 1/8)

となり、胴部は膨らみを持っている。突帯は頸部下に断面三角形を1条、胴部中位に断面コ字形のものを2条貼り付けている。調整は内面が継毛目を施した後粗くナデを行い、外面は継刷毛の後丁寧なナデ消しを行っているが、底部付近のみ継刷毛が残っている。胎土には1~3mmの砂粒を多く含んでおり、色調は淡赤褐色を呈する。

#### K023 (第11図、写真18・72)

調査区南側で検出した接口式の大形棺である。主軸方向はN—43°—Wにとり、埋置角度は43°である。K022同様S K019と一緒にものとして掘り下げを行ったところで、蓋棺を確認している。

墓坑平面は一辺1.2mの略方形を呈し、途中に平坦面を有する階段状の掘り方である。また底面は甕棺の埋置方向に傾斜している。

**出土遺物（第11図 18・19）** 18は完形に近い鉢である。器高50.2cm、口径58cmを測る。口縁部は逆L字状に屈曲し、上面は内傾している。調整は内外面丁寧なナデを行い、頸部内面に幅2cm程の小口痕跡を残す。また屈曲部直下には断面三角形の突帯を1条貼り付ける。

19はほぼ完存する大形の甕である。器高91cm、口径57.6cmを測る。口縁部は逆L字状に屈曲し、上面は内傾している。調整は内外面に丁寧なナデを行うが、外面底部付近に僅かに刷毛目を残している。また頸部直下及び胴部に突帯を貼り付けている。

#### K026（第12図、写真19・72）

調査区北側で検出した大形甕である。主軸方向はN—77°—Eにとり、埋置角度は約25°である。東側を搅乱により失うと共に上面の削平が進み、下甕の下半部分が残存するのみである。墓坑は甕棺に沿うように認められ、甕棺底部付近はやや抉りこんで掘削されている。

**出土遺物（第12図 20）** 上部を失し、残存高84.2cm、底径11.8cmを測る。調整は内外面ナデを行うが、内面には下半を中心に板状工具の小口痕跡が明瞭に残っている。胴部は緩やかな膨らみを有し、中央付近に2条の断面コ字形突帯を貼り付ける。

#### K027（第12図、写真20・72）

調査区北側で検出する。主軸方向はN—82°—Eにとり、埋置角度は約26°である。溝状の搅乱と上面の削平が進み、下甕が部分的に残るのみである。墓坑は現状で長円形を呈し、底面はほぼ平坦となっている。

**出土遺物（第12図 21）** 胴部下半の1/5程度が残存するのみである。残存高50cm、底径11.4cmを測る。調整は内外面丁寧なナデを行い、外面下位に帶状に板状工具の小口痕跡が残っている。また中位には2条の突帯を貼り付けている。

#### K028（第13図、写真21・72）

調査区北側で検出し、主軸方向はおよそN—20°—Eであろう。上面の削平及び搅乱が進み、現状では下甕の胴部が部分的に残るのみである。墓坑は1.1×0.7mの長円形を呈し、底面はほぼ平坦となっている。図示していないが、掘り方内南側には2次的に人頭大の石材が押し込まれたような状態で落ち込んでおり、甕の破片が本来の位置より動いている。

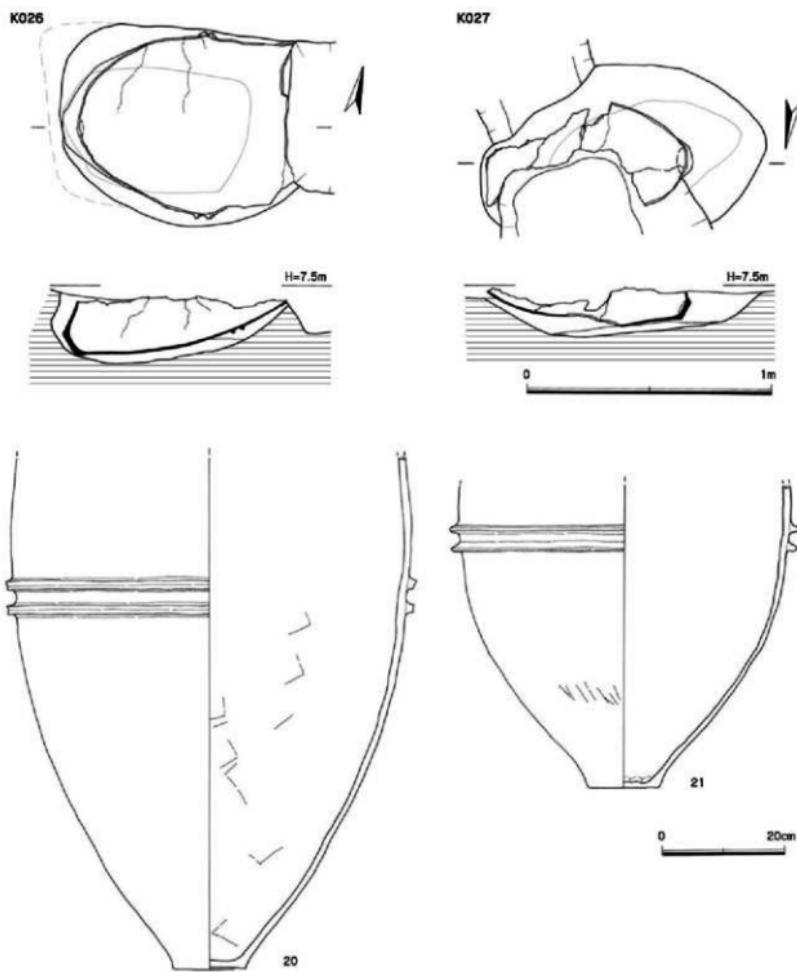
**出土遺物（第13図 22）** 胴部下半を中心として1/5程度が残り、残存高56cmを測る。調整は内外面ナデによる。また岡化し得なかったが、内側に張り出しを有する逆L字状口縁部を有し、口縁部の外縁部には打ち欠きを行っている。また口縁下には断面三角形の突帯1条を貼り付ける。

#### K029（第13図、写真22・73）

調査区北側で検出した接口式の大形甕で、SK045を切る。主軸方向はN—63°—Eにとり、埋置角度は約20°である。西側の搅乱により、上甕は胴部中位以下を失っている。墓坑は平面（長）方形を呈するものと考えられ、下甕の挿入部分は大きく抉り込んでいる。また掘り方は、階段状に掘削されており、底面はほぼ平坦である。

**出土遺物（第13図 23・24）** 23は口縁部～胴部上半部が残存し、残存高37cmを測る。口縁部は逆L字状に屈曲し、上面は内傾する。調整は内外面丁寧なナデを行い、色調は淡赤褐色を呈する。

24はほぼ完存する下甕で、器高91.5cm、口径50.8cmを測る。口縁部は内傾した逆L字状を呈し、屈曲部内面は僅かに張り出しを有する。胴部は内外面共に刷毛の後丁寧なナデを行っているが、両面に縦方向の刷毛目が残っている。胎土には砂粒を多く含み、赤褐色を呈する。

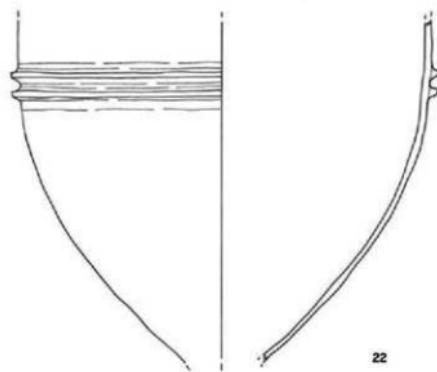
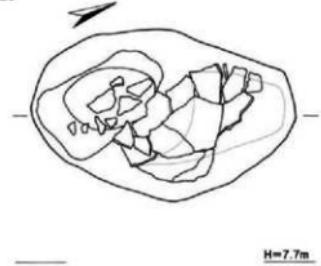


第12図 K026・027及び出土遺物実測図 (1／20, 1／8)

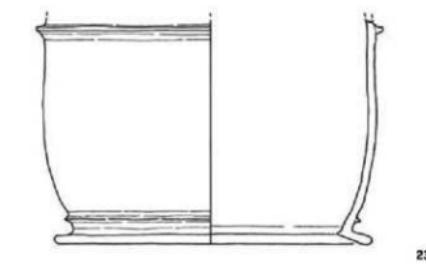
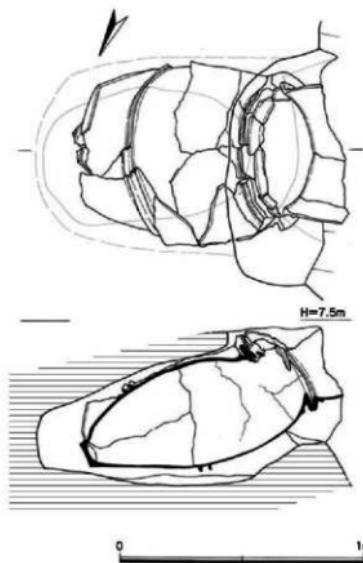
**K030** (第14図、写真23・73)

調査区北側で検出し、主軸方向はおよそN—56°—Eにとる。削平により掘り方が深さ10cm程度残るのみである。甕棺は底部及び胴部の一部分しか残存していない。

K028



K029



第13図 K028・029及び出土遺物実測図 (1/20, 1/8)

**出土遺物（第14図 25）** 底部の一部及び胴部下半の1/4程度が残存している。残存高47cm、復元底径11.4cmを測る。調整は胴部内外面共にナデ調整による。また外面突帯周辺には黒色顔料が認められるが、器面の摩滅のため下半部分では不明となる。

**K031** (第14図、写真24・73)

調査区北側で検出した接口式の大形棺である。主軸方向はN—63°—Eにとり、埋置角度は37°である。削平により上蓋の一部を失うが、削平は下蓋にはほとんど及んでいない。墓坑は長軸1.7m、短軸1.1mの平面長方形を呈する。掘り方は西側に2段の平坦面を有する階段状となり、下蓋の挿入部分は奥行きに35cm程の抉りこみが認められる。また掘り方底面はほぼ平坦である。

**出土遺物（第14図 26・27）** 26は胴部下半を部分的に失っている。復元器高75cm、口径49.4cmを測る。口縁部は内傾した逆L字状を呈する。調整は内外面丁寧なナデを行う。胴部は緩やかな膨らみを有し、中位よりやや高い位置が最大径となる。

27は器高86.1cm、口径54.6cmを測る。口縁部は逆L字状に屈曲し、内面には張り出しを有する。上面は外側が水平で、内側は折れ曲がり内傾している。調整は内外面ナデを行うが、外面下端部には刷毛目が残っている。胎土はやや粗く、2mm前後の砂粒を多く含み、色調淡赤褐色を呈する。

**K032** (第15図、写真25)

調査区北側のK031南隣で検出した。蓋の底部の一部を確認している。掘り方は不明瞭だが、蓋棺の底部の一部と考えられる。

**出土遺物（第16図 28）** 底部の1/3破片である。復元底径9.7cm、残存高7.8cmを測る。外底面は平底を呈し、外面調整は縦方向の刷毛目により、内面はナデを行う。

**K033** (第15図、写真26)

調査区中央部で検出した。主軸方向はN—44°—Eにとり、埋置角度はおよそ20°である。上面の削平により大部分を失っており、墓坑は現状で0.9×0.7mの長円形を呈し、深さは10cmが残るのみである。

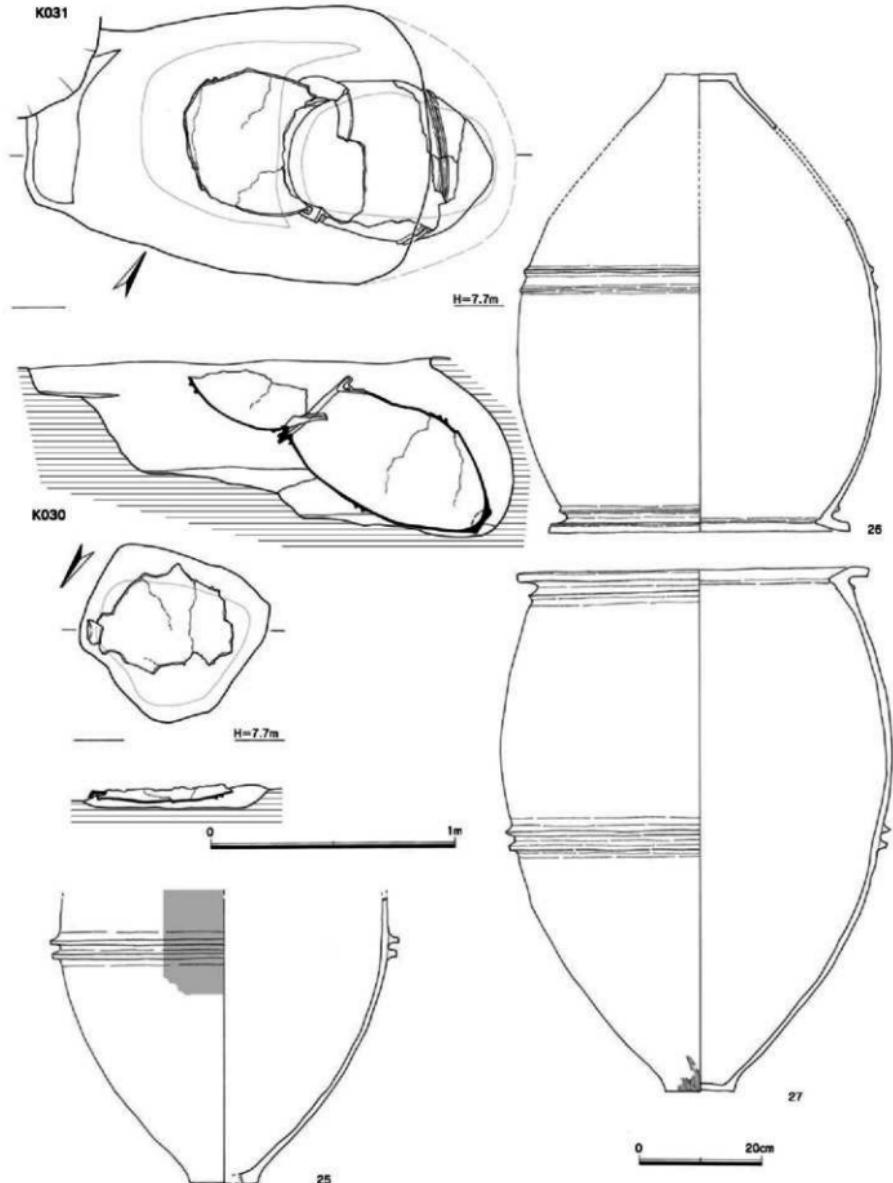
**出土遺物（第16図 29）** 胴部下半の1/4程度が残存しており、残存高48cm、復元底径11cmを測る。外面に丁寧なナデを行うが、外面底部付近には継刷毛が残っている。胴部には断面コ字形の突帯を2条貼り付けている。胎土には沙粒を比較的多く含み、明橙色を呈する。

**K035** (第15図、写真27・73)

調査区中央部で検出した接口式の大形棺である。主軸方向はN—24°—Eにとり、埋置角度は31°である。調査時の不手際により上蓋を取り上げてしまい、復元的に作図を行っているが、痕跡から口縁部は打ち欠きを行い、下蓋口縁部平坦面に接しているものと考えられた。また墓坑は本來長軸1.7m、短軸1.5mの平面隅丸長方形を呈する豊坑を掘り込んだ後、60cm程度の抉りこみを有する。断面は南側に2段の平坦面を有する階段状となり、底面はほぼ平坦となる。

**出土遺物（第16図 30・31）** 30は破片の多くが下蓋内に崩落しており、胴部下半の1/3が消失するのみである。器高81cm、口径46cmを測る。調査時には口縁部打ち欠きと考えたが、接合時には口縁部は完存していることが明らかとなった。調査時の不手際はあったが、口縁外縁部や頭部突起のスタンプも残っていないため、埋葬時には打ち欠きを行っていたものと考えられ、打ち欠いた口縁部分の破片についても埋葬時に埋めたものと考えておきたい。調整は内外面ナデを行っているが、内面にはナデ残した刷毛目が多く残っている。また外面上半部には横方向の板状工具によるナデ痕跡が認められる。胴部上位からI縁部にかけて黒色の顔料か塗布された痕跡が残っている。

31は8割ほどが残存し、器高94cm、口径69.6cmを測る。口縁部は内面にも張り出しを有する逆



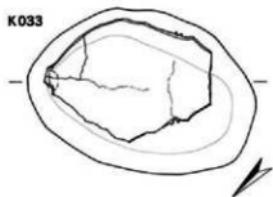
第14図 K030・031及び出土遺物実測図 (1/20, 1/8)

K032



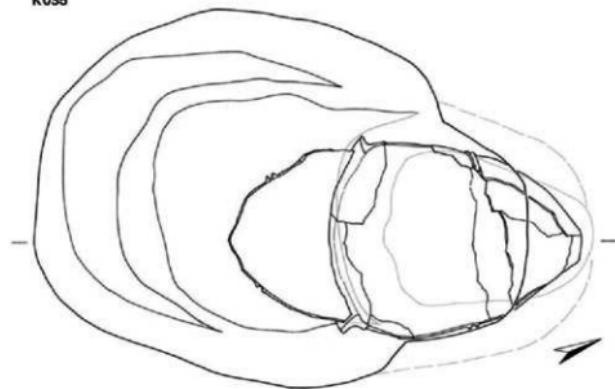
H=7.5m

K033



H=7.5m

K035



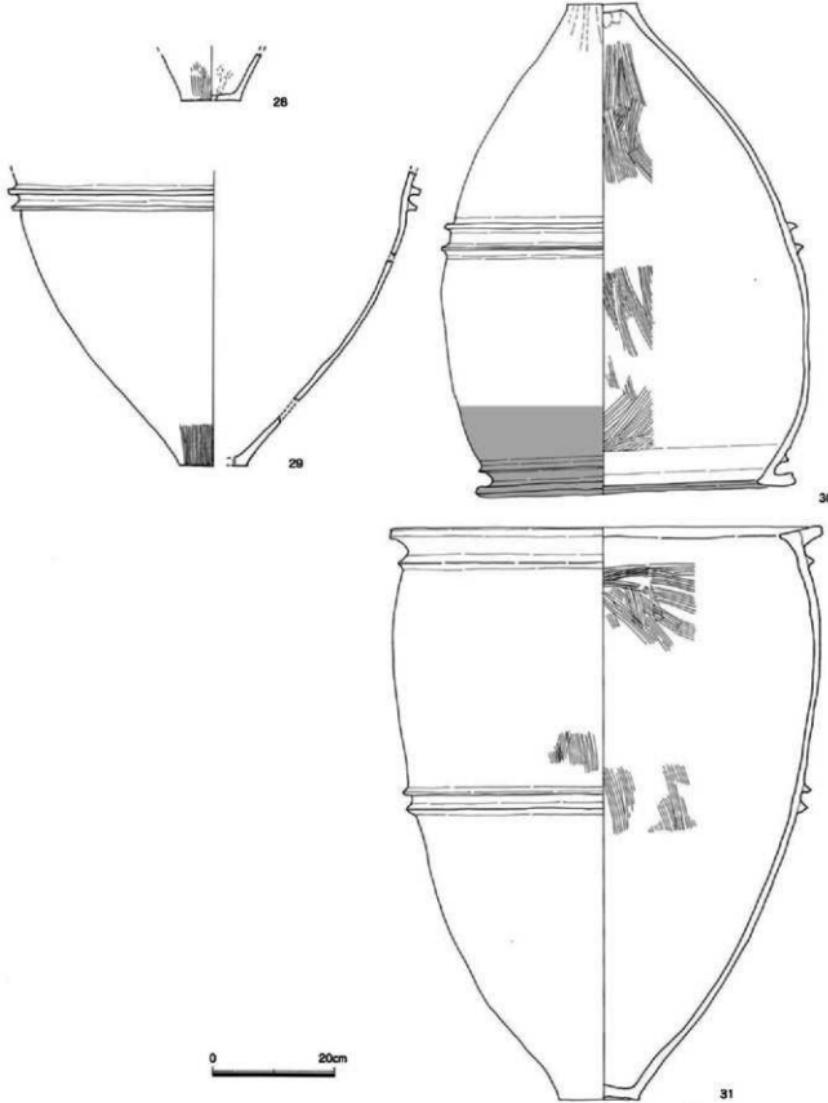
H=7.7m

0

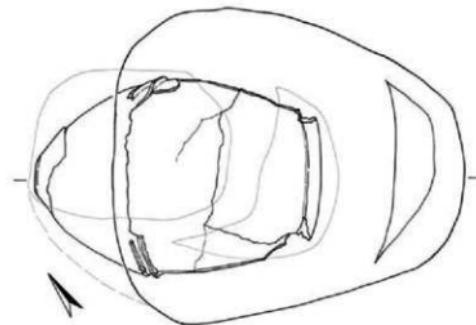
1m

第15図 K 032・033・035実測図 (1/20)

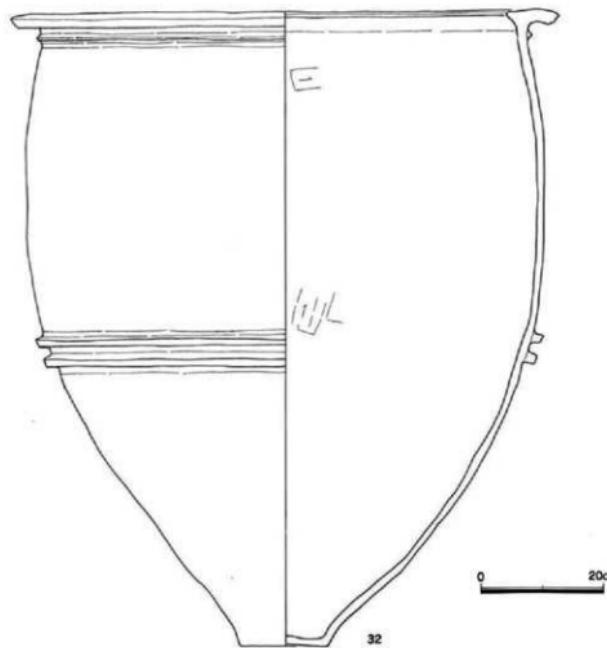
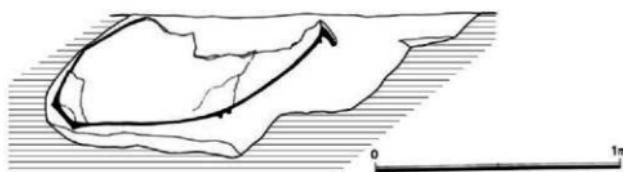
L字状に屈曲し、上面は内傾している。調整は外面は横ナデを行うが、胴部中位に部分的に刷毛目が残っている。また内面も上半部にナデ消し残した刷毛目が認められる。



第16図 K032・033・035出土遺物実測図 (1/8)



H=7.7m



20cm

第17図 K036及び出土遺物実測図 (1/20、1/8)

### K036 (第17図、写真28・73)

調査区中央部で検出した大形の单棺である。主軸方向はN—55°—Wにとり、埋置角度は40°である。削平により甕の上部を失っており、木蓋の痕跡等は認められない。墓坑は長軸1.4m、短軸上端0.7m、下端1.3mの平面やや歪な隅丸長方形を呈する。掘り方は2段の平坦面を有する階段状となり、下甕の挿入部分は奥行きに35cm程の抉りこみが認められる。また掘り方底面はほぼ平坦である。

出土遺物 (第17図 32) 全体の2/3程度が残存し、器高104cm、口径83cmを測る。口縁部は内側に張り出しを有した逆し字状に屈曲し、上面はほぼ平坦である。調整は内外面丁寧なナデを行い、内面には幅3cm程の板状工具の小口痕跡を残す。また屈曲部直下及び脣部に断面コ字形の突帯を貼り付けている。

### K037 (第18図、写真29・73)

調査区中央部で検出した接口式の大形棺である。主軸方向はN—37°—Eにとり、埋置角度は19°である。削平により上・下甕の一部を失っている。墓坑は本来長軸1.5m、短軸1.35mの平面隅丸長方形を呈するものと考えられ、下甕挿入部分は大きく抉りこんで掘削されたものと考えられる。掘り方は2段の平坦面を有する階段状となり、下甕の挿入部分の抉りこみは1mほどに復元できる。また掘り方底面は緩やかに湾曲するが、ほぼ平坦である。

出土遺物 (第18図 33・34) 33は上半部の1/3が残る上甕である。残存高51.8cm、復元口径56cmを測る。口縁部は逆し字状に屈曲し、上面は内傾している。内外面摩滅が進んでいるが、丁寧なナデを行っている。胎土には微砂粒を多く含み、色調淡赤褐色を呈する。

34は1/2が残る下甕である。復元器高105cm、復元口径58cmを測る。口縁部は内側に張り出しを有する逆し字状に屈曲し、上面は内傾している。調整は外面には丁寧なナデを行うが、底部付近に刷毛目が残り、脣部下半に幅2~3cmの小口痕跡が認められる。また内面下半にはナデを行っているが、上半はナデを行わず、全体に刷毛目を残している。頭部外面以下10cm幅で黒色顔料のような痕跡が残っているが、やや不明瞭である。

### K039 (第19図、写真30・73)

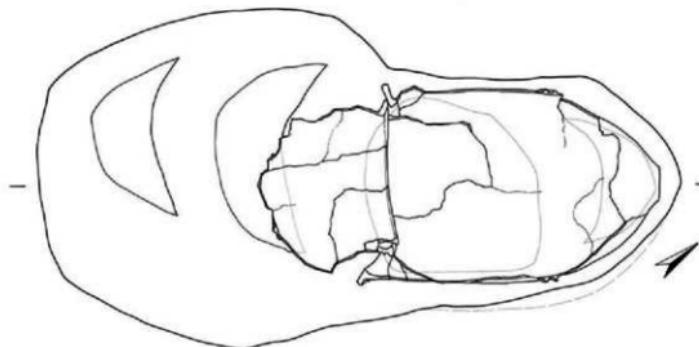
調査区中央部で検出した小形の单棺である。主軸方向はN—35°—Eにとり、埋置角度は30°である。削平により甕の一部を失う。墓坑は本来1辺0.7m程度の歪な方形を呈するものと考えられるが、上面の削平により検出面では不規則な形状となっている。また断面は1段の平坦面を有する階段状となり、甕の挿入部分には抉りこみが認められる。

出土遺物 (第19図 35) 上半部の1/5、下半部の3/4が残存する。器高53cm、口径31.6cmを測る。口縁部は「く」字状に屈曲し、内面に嘴状の張り出しを有する。また頭部には断面三角形の突帯を1条貼り付ける。調整は外面全体に綿刷毛を行い、内面はナデ調整による。胎土には径1~3mmの砂粒を比較的多く含み、色調は暗茶褐色を呈する。

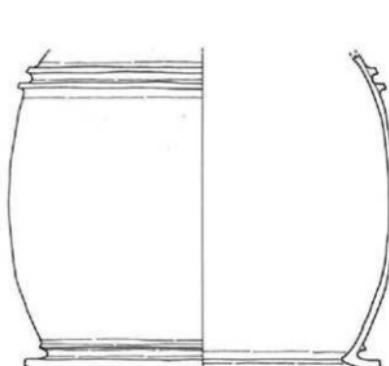
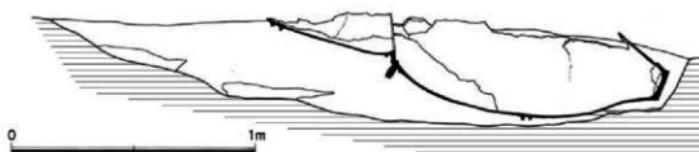
### K040 (第19図、写真31・73)

調査区中央部で検出した小形棺である。主軸方向はN—54°—Wにとり、埋置角度は34°である。上面の削平が大きく、南側の一部も攪乱により失っている。墓坑は径0.7~0.8mの略円形を呈し、深さは20cm程を残すのみである。

出土遺物 (第19図 36) 全体の1/4程が残存し、復元器高55cm、口径29.4cmを測る。口縁部は「く」字状に屈曲する。摩滅が進んでおり不明瞭であるが、調整は外面上半がナデ、下半は綿刷毛を行い、内面は全体にナデ調整である。脣部中位には断面コ字形の突帯を1条貼り付ける。

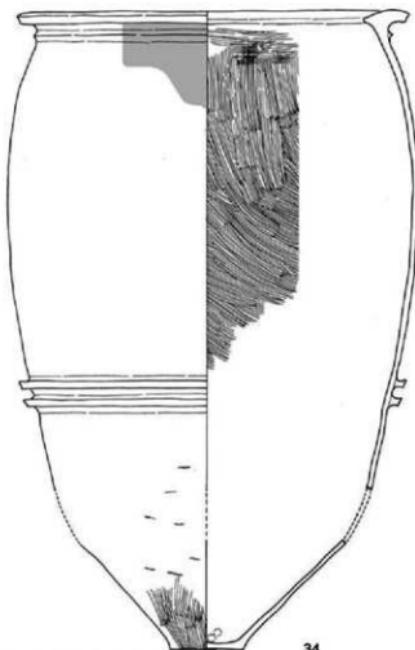


H=7.7m



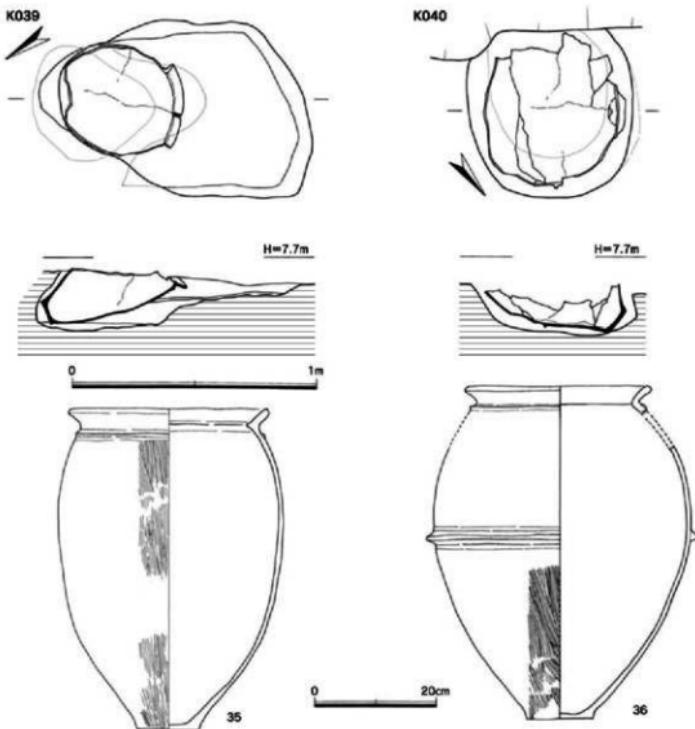
33

0 20cm



34

第18図 K037及び出土遺物実測図 (1/20、1/8)



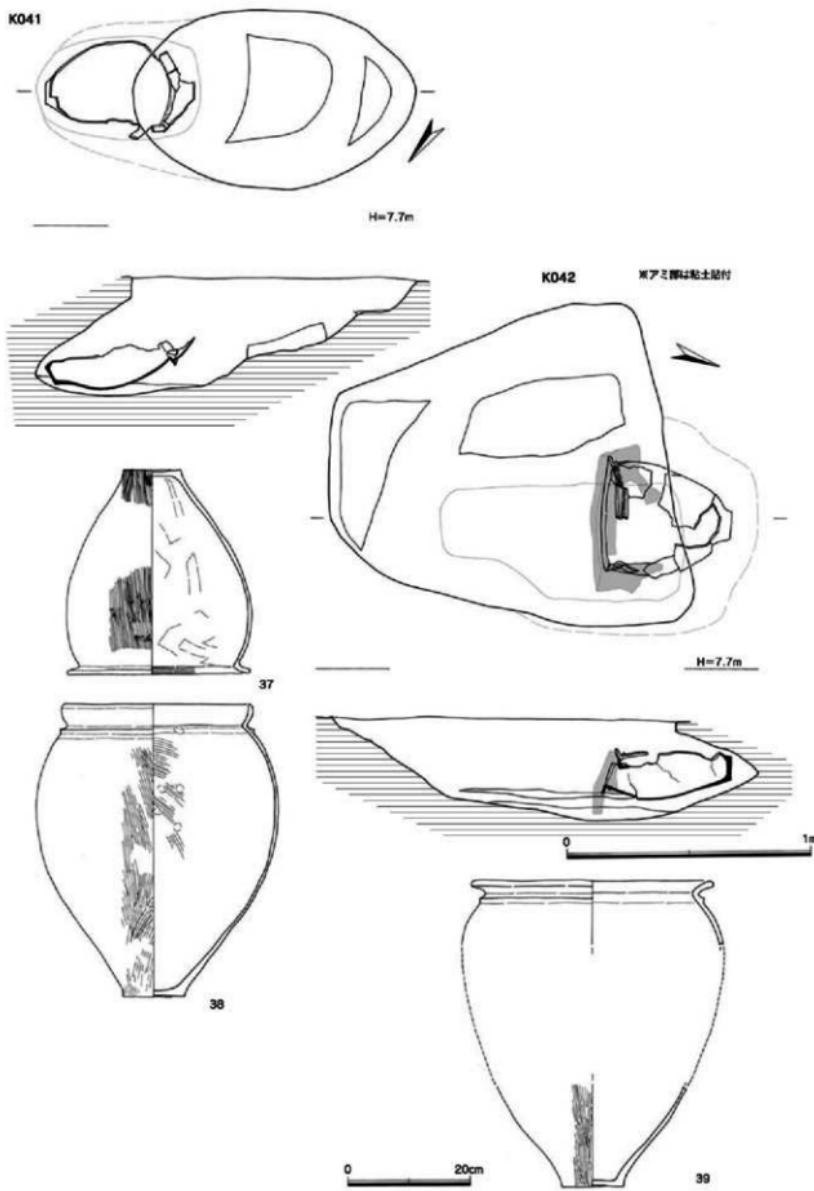
第19図 K039・040及び出土遺物実測図 (1/20, 1/8)

K041 (第20図、写真32・74)

調査区中央部で検出した接口式の小形棺である。主軸方向はN—52°—Eにとり、埋置角度は23°である。周囲の状況から削平が大きいものと考えられるが、この斎棺に関しては主体部まではあまり削平が及んでいない。上・下蓋ともに土圧により崩落しており、上蓋には打ち欠きを行っている。墓坑は1.2×0.7mの平面長円形を呈する。掘り方は北側に2段の平坦面を有する階段状となり、下蓋の挿入部分には40cm程の抉りこみが認められる。

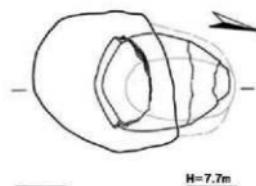
出土遺物 (第20図 37・38) 37は上蓋である。器高33.8cm、口径29.4cmを測る。口縁部は「く」字状に屈曲し、上面は内傾している。調整は胴部外面及び口縁部内面に刷毛目を有し、胴部中位はナデ消している。また内面は板状工具によるナデ調整を行っており、小口痕が理據に認められる。胎土には微砂粒が多く含まれており、色調は淡褐色を呈する。またこの蓋は打ち欠いて使用されたが、復元を行うと口縁部はほぼ完存していた。同様の事例はK035の上蓋にも認められ、打ち欠きを行った残片についても、埋葬時に同時に埋めたものと考えられる。

38は全体の1/2程が残存し、復元器高48.2cm、復元口径30.4cmを測る。口縁部は「く」字状に屈曲し、内面は内済する。胴部外面は全体に縦刷毛を行い、内面は横～斜方向の刷毛目を行った後、

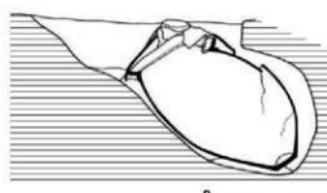
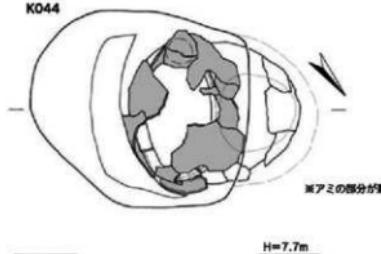


第20図 K041・042及び出土遺物実測図 (1/20, 1/8)

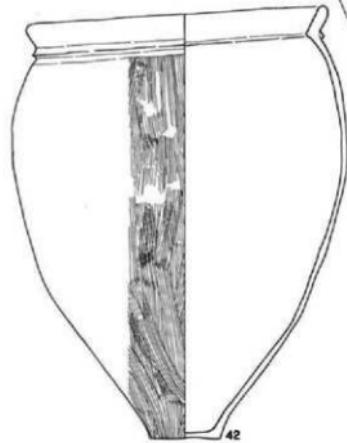
K043



K044



0 1m



0 20cm

第21図 K043・044及び出土遺物実測図 (1/20, 1/8)

ナデ消しを行うが、上半部分を中心に刷毛目が残るところがある。色調は淡赤褐色を呈する。

#### K042 (第20図、写真33)

調査区中央部で検出した小形の単棺である。主軸方向はN—20°—Wにとり、埋置角度はほぼ水平である。蓋の一部が土圧によって崩落しているが、比較的残存状態は良好である。蓋の口縁部から胴部上半部分には青灰色粘土が貼り付けられている。粘土は特に口縁部分に厚く丁寧に貼り付けられており、外側が平坦化していることから木蓋の痕跡と考えられる。墓坑は長軸1.45m、短軸上部0.6m、下部1.3mを測り、平面は歪な長方形を呈する。掘り方は平坦面を有する階段状となり、検出面からの深さは40cmである。また蓋の挿入部分では35cm程の抉りこみが認められる。

出土遺物 (第20図 39) 口縁部及び底部周辺はよく残っているが、胴部周辺はほとんど欠失しているため、復元的に作図している。調査時には胴部破片も良好に残っており、整理時に散逸してしまった可能性が高い。口径は38.6cm、器高は50cm程度に復元できる。口縁部は「く」字状に屈曲し、頭部外面には断面三角形の突帯を1条貼り付ける。

#### K043 (第21図、写真34)

調査区中央部で検出した小形棺である。当初黒褐色土の不整形な土坑として掘り下げを行ったが、長さ1.5m程度、幅0.7m、深さ15cmの隅丸長方形土坑 (SK063) と切りあう跳棺墓 (K043) を確認した。K043は小形の単棺である。主軸方向はN—14°—Wにとり、埋置角度は17°である。周囲の状況から削平が大きいものと考えられるが、上面の一部を失う他は比較的の残存状態は良好である。墓坑は底面が緩やかに傾斜しており、跳棺埋置部分は25cm程抉りこんで掘削されている。

出土遺物 (第21図 40) 器壁磨耗のためか胴部中位が欠失しており、復元的に作図している。復元器高50cm、復元口径37cm程度であろう。口縁部は「く」字状に屈曲し、内湾気味に立ち上がる。調整は摩滅が進み不明瞭であるが、外面は継刷毛、内面はナデ調整である。

#### K044 (第21図、写真35・74)

調査区中央部で検出した小形棺である。主軸方向はN—46°—Wにとり、埋置角度は47°である。上蓋は蓋の胴部を打ち欠いたものを蓋として転用し (図上縦掛け部分)、下蓋はほぼ完存している。墓坑は長さ0.9m、幅0.8mの不整形を呈する。掘り方は南側に1段の平坦面を有する階段状となり、下蓋の挿入部分は30cm程抉りこんでいる。

出土遺物 (第21図 41・42) 41は胴部下半及び口縁部の一部が残存する。口縁部内面は内湾する。また調整は内外面共にナデ調整であるが、未接合ながら外面継刷毛の残る破片も出土している。

42は略完成形の下蓋である。高71.2cm、口径48cmを測る。口縁部は「く」字状に屈曲し、屈曲部内面には張り出しを有し、端部は面取りを行う。また口縁部内面は僅かに内湾気味である。調整は胴部外面全体が継刷毛、内面はナデを行う。胎土には微砂粒が多く含み、色調は淡黄褐色を呈する。

#### K046 (第22図、写真36)

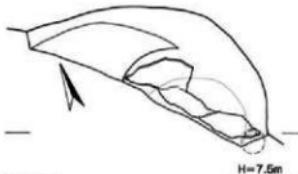
調査区北側で検出した。K047→K046の関係となる。上面の削平と共に南西側の多くのを搅乱により失っており、底部～胴部下半の一部を残すのみで、残存状態は不良である。復元主軸方向はN—68°—Wにとる。墓坑規模は不明であるが、掘り方は1段の平坦面を有する階段状を呈する。

出土遺物 (第22図 43) 胴部下半の1/6程度が残存するのみである。調整は外面全体に細かな刷毛目を施し、ナデは行わない。また内面はナデ調整である。色調はにぶい赤褐色を呈する。

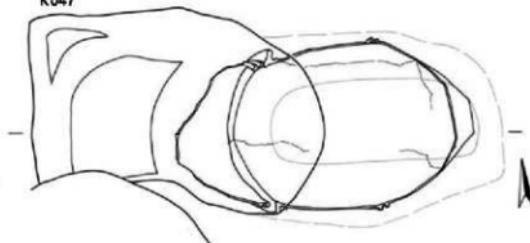
#### K047 (第22図、写真37・74)

調査区北側で検出した接口式の大形棺である。主軸方向はN—84°—Wにとり、埋置角度は33°である。上蓋は口縁部を打ち欠いている。下蓋は削平により口縁部の一部を失うが、ほぼ完存してい

K046

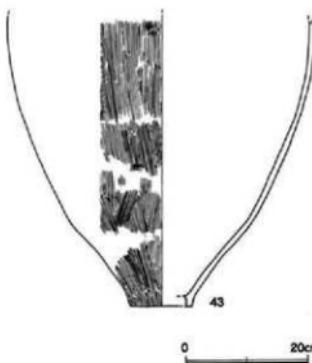


K047



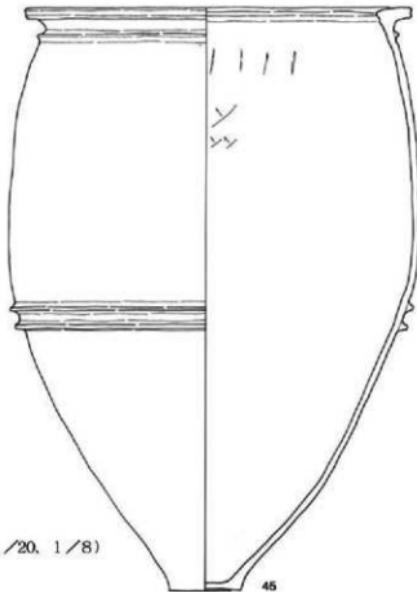
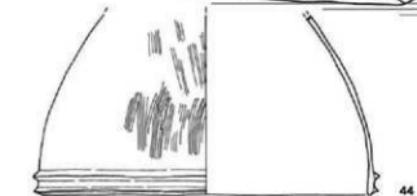
0

1m



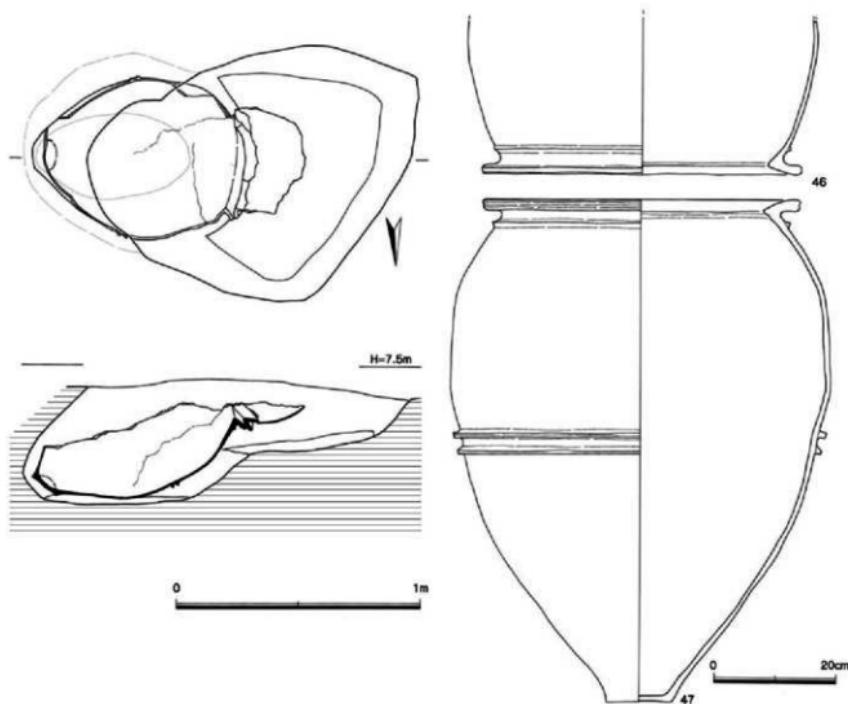
0 20cm

44



45

第22図 K046・047及び出土遺物実測図 (1/20, 1/8)



第23図 K048及び出土遺物実測図 (1/20, 1/8)

る。墓坑は長さ1.2m、幅0.7mの不整形を呈する。掘り方は北側に1段の平坦面を有する階段状となり、下部の挿入部分は75cm程大きく抉りこんでいる。

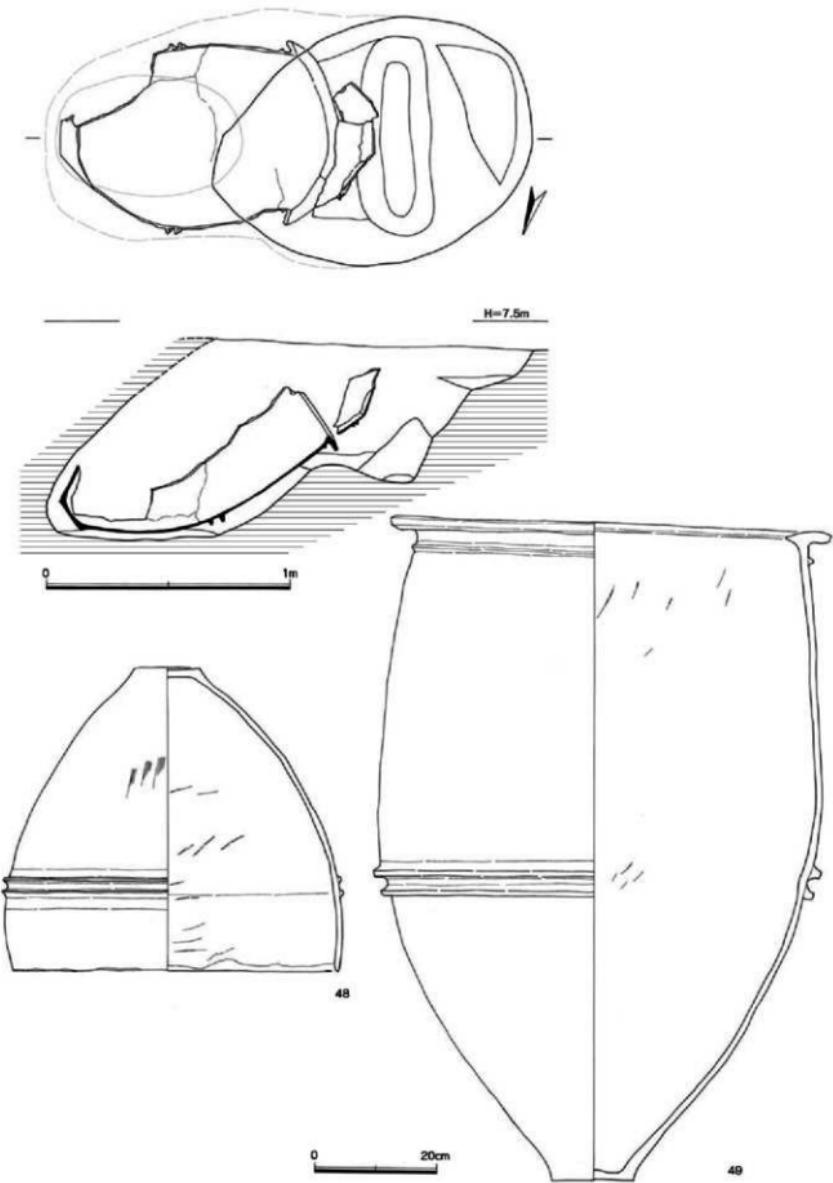
出土遺物 (第22図 44・45) 44は口縁下の2条の突帯より上部を打ち欠いている。突帯は断面三角形を呈する。調整は外面には刷毛目、内面はナデを行う。

45は全体の9割程が残存する。器高90.9cm、口径59.4cmを測る。口縁部は内側に張り出しを有した逆し字形を呈し、上面は内傾する。調整は胴部内外面に丁寧なナデを行うが、内面上半部には幅3~4cmの板状工具の小口痕跡が断続的に残されている。

#### K048 (第23図、写真38・74)

調査区北側で検出した接口式の大形棺である。主軸方向はN—87°—Wにとり、埋置角度は29°である。上部は大きく削平を受けているが、下部は比較的の遺存状態は良好である。墓坑は下部の上位で崩落しているため歪な形状となっている。掘り方は西側に平坦面を有する階段状となる。

出土遺物 (第23図 46・47) 46は上部の1/4を残存するのみである。残存高25cm、復元口径50.6cmを測る。口縁部は内傾した逆し字形を呈する。調整は内外面ナデによる。胎土には1~5mmの砂粒を多く含み、色調は淡橙色を呈する。



第24図 K049及び出土遺物実測図 (1/20, 1/8)

47は全体の1/3程が残存し、器高82.8cm、復元口径49cmを測る。口縁部は内傾した逆L字状に屈曲する。調整は内外面に丁寧なナデを行う。胴部中位には断面コ字形の突帯を2条貼り付ける。

**K049** (第24図、写真39・74)

調査区北側で検出した接口式の大形棺である。主軸方向はN-73°-Eにとり、埋置角度は33°である。搅乱坑により調査時には主体部が破損している部分が多い。上蓋には打ち欠きを行っている。墓坑は1.3×1mの平面長円形を呈し、断面は2段の平坦面を有する階段状となる。また平坦面上には幅30cm、長さ80cm、深さ5cm程の溝状の掘り込みが認められる。

**出土遺物** (第24図 48・49) 48は胴部上半より打ち欠きを行い、上蓋として使用した甕である。搅乱により崩落していたが、ほとんどの破片が下甕内に残されていた。残存高50cm、打ち欠き部分径53.3cmを測る。内面はナデを行い、幅6cm程の板状工具の小口痕跡が明瞭に残っている。また外側もナデによるが、部分的に縦刷毛が残されており、底部付近には板状工具の小口痕跡が残っている。

49はほぼ完形として残る下甕である。器高109.3cm、口径70cmを測る。口縁部は比較的平坦な逆L字状を呈し、内側に張り出しを有する。調整は内外面に丁寧なナデを行い、内面には断続的な小口痕跡が残されている。胎土には微砂粒を多く含み、色調は赤褐色を呈する。

**K050** (第25図、写真40・74)

調査区北側で検出した大形棺である。上面の削平が大きく、墓坑底付近が残存するのみである。主軸方向はN-30°-Wにとり、埋置角度は水平に近いものと考えられる。甕は口縁部内面を打ち欠いている。上蓋部分は認められなかつたため単棺と考えられる。墓坑の検出面からの深さは10cm程度である。

**出土遺物** (第25図 50) 下半部の1/3を失い、上部の1/4が残っている大形の甕である。残存高65.8cm、復元口径52cmを測る。口縁部は内側を打ち欠いているが、外傾したT字状を呈するものと考えられる。胴部調整は内面が全体に丁寧なナデを行い、外側はナデ消しを行わず、突帯周辺を除いて全面に縦刷毛が明瞭に残っている。外面には径6cm程の黒斑が認められる。

**K056** (第25図、写真41)

調査区北側で検出した。主軸方向はN-59°-Eにとる。木根による搅乱を除去した後に確認した甕棺で、残存状態は不良である。墓坑は検出面からの深さ15cm程となっている。上蓋は胴部の一部が残り、下甕は墓坑底付近の底部へ胴部が残るのみである。

**出土遺物** (第25図 51) 上甕は胴部のごく一部しか残存していないため図化を行っていない。51は上半部分を打ち欠いた下甕で、下半部の1/5程度が残存している。残存高48.4cm、打ち欠き部径57.2cmを測る。胴部には断面三角形の突帯2条を貼り付ける。内外面は全体に丁寧なナデを行うが、内面には部分的に刷毛目が残っている。

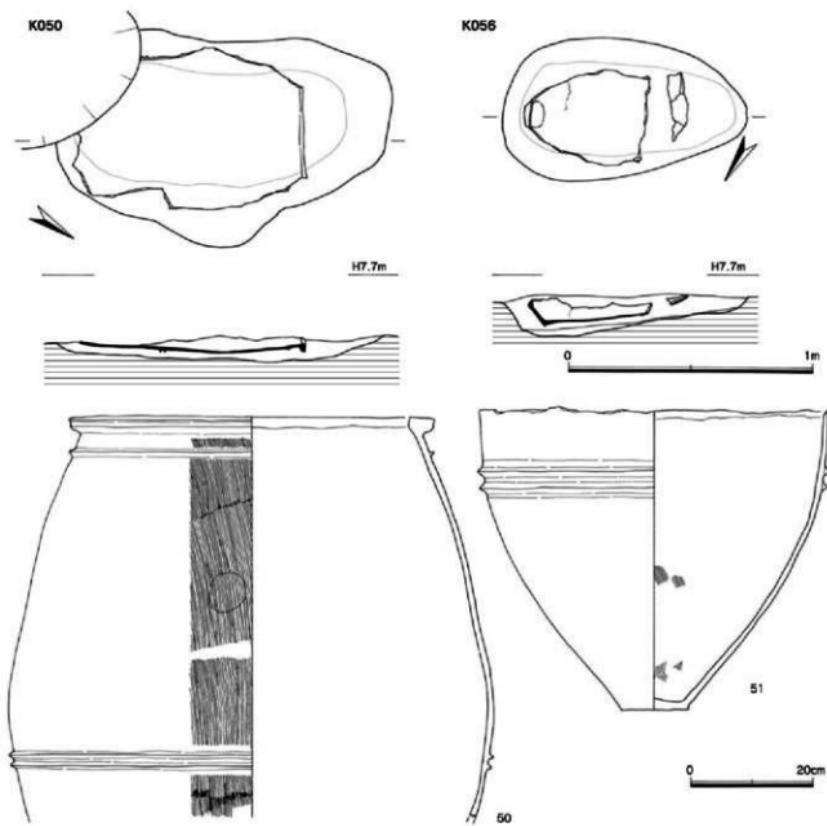
**K057** (第26図、写真42)

調査区北側で検出し、主軸方向はN-14°-Wである。木根搅乱除去後に確認しており、残存状態は不良である。現状で墓坑は0.9×0.5mの長円形を呈し、検出面からの深さは5cm程である。甕は墓坑底に貼り付いた部分が残るのみである。

**出土遺物** (第26図 52) 頭部突帯以下の胴部上半の1/5程が残存するのみで、残存高54.5cmを測る。頭部及び胴部の突帯は断面三角形を呈し、内外面の調整はいずれも丁寧なナデを行っている。胎土には1~5mmの砂粒を多く含み、色調は褐色~淡褐色を呈する。

**K058** (第26図、写真43・74)

調査区北側で検出した大形棺である。主軸方向はN-58°-Eにとり、埋置角度は28°である。削



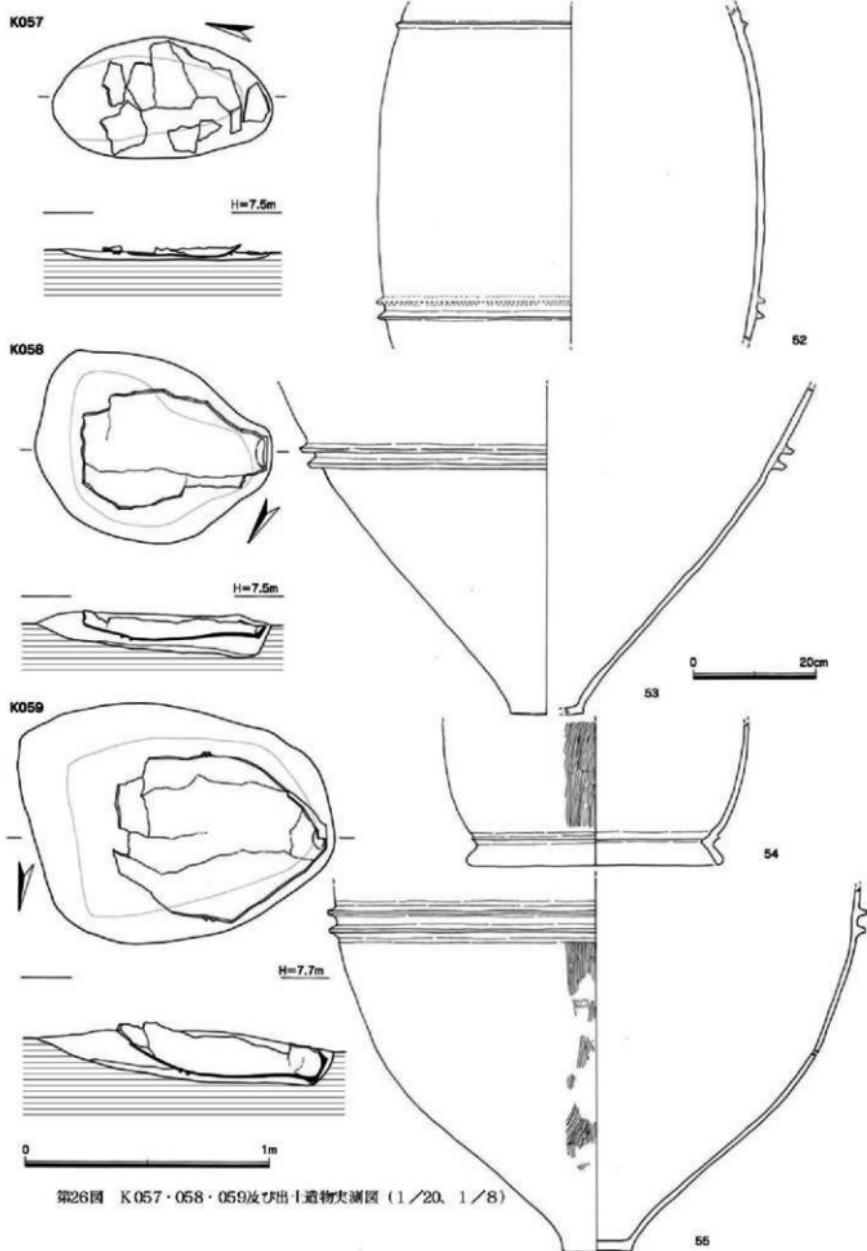
第25図 K050・056及び出土遺物実測図 (1/20, 1/8)

平・搅乱により失われている部分が大きく、残された甕も小破片化していた。甕は底部～墓坑底付近の胴部が残っている。墓坑は $1.2 \times 1\text{ m}$ のやや歪な長円形を呈し、検出面からの深さは20cm程度である。

**出土遺物 (第26図 53)** 下半部の1/5が残存する。残存高54cm、復元底径12cmを測る。胴部はハ字状に大きく開きながら立ち上がり、中位に断面コ字形の突帯を2条貼り付けている。調整は内外面丁寧なナデによる。胎土には1～4mmの砂粒を多く含み、色調は褐色を呈する。

#### K059 (第26図、写真44)

調査区北側で検出した。主軸方向はN—79°—Eにとり、埋置角度は約23°である。甕は墓坑底付近が残るのみである。墓坑は長軸1.3m、短軸1mで、検出面からの深さは25cm程である。なお調



第26図 K 057・058・059及び出土遺物実測図 (1/20, 1/8)

査時には上部は削平されて失われていたものと考えられたが、整理段階で、下部内に崩落したと考えられる。甕の上部を確認し、上部の可能性を考えた。

出土遺物（第26図 54・55） 54は整理時に復元できた甕の上部で、口縁部は完存している。残高23.5cm、復元口径40.4cmを測る。口縁部は「く」字状に屈曲し、内面は僅かに内湾している。胴部内面はナデ、外面は刷毛目調整を行っている。

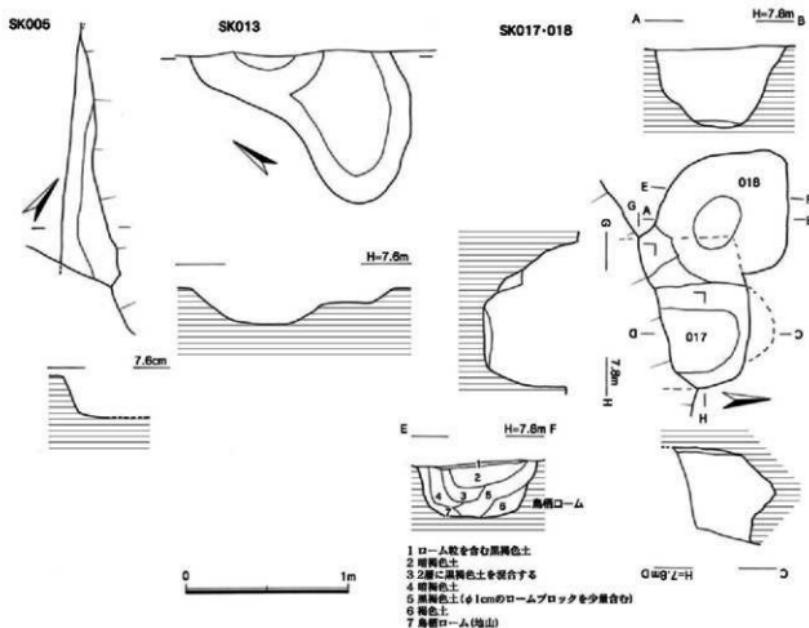
55は下半部の1/3が残存する。残高60cmを測る。底部付近は外半球形にすぼまり、重心が高くなる形状を呈する。調整は内外面ナデによるが、外面には綴刷毛が残っている。胎土には1~3mmの砂粒を多く含み、色調は赤褐色を呈する。

## 2) 土坑墓・土坑

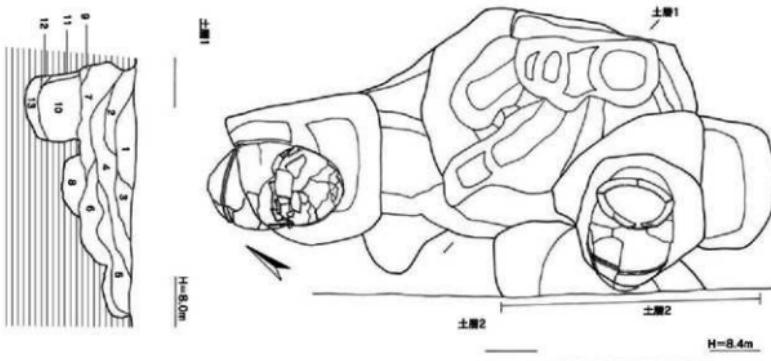
調査区内では数基の土坑を確認しているが、埋葬遺構の可能性を有するものもある。出土遺物は少量であり、遺構の性格や時期など不明瞭なものが多く認められる。

### SK005 (第27図)

調査区南側で検出した土坑である。東側の大部分をSD002に削平され、南側をK006に切られたり、西壁の一部が残るのみである。壁は直線的に延びて主軸方向をN-36°-Wにとり、深さ30cmを測る。底面は残存部分ではほぼ平坦である。埋土は黒色土で、出土遺物はない。土坑墓の一

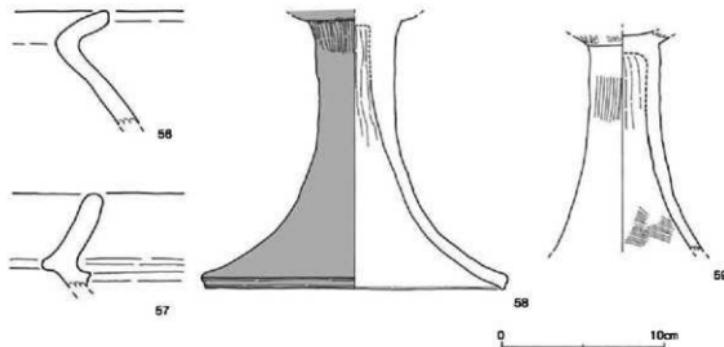
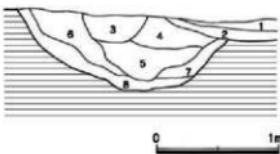


第27図 S K005・013・017・018大測図 (1/30)



- 土層1**
- 1 暗褐色土(鳥糞ローム粒を多く含む)
  - 2 黒褐色土(鳥糞ローム粒を含む)
  - 3 2層に同じ
  - 4 暗褐色土(黒褐色土と鳥糞ロームをブロック状に含む)
  - 5 2層に同じ
  - 6 茶褐色土
  - 7 明褐色土(鳥糞ローム粒を多く含む)
  - 8 黄褐色土
  - 9 黑色土
  - 10 黑褐色土と暗褐色土混合(ややしまりなし)
  - 11 10層よりやや盛り
  - 12 にぶい黄褐色土
  - 13 灰味を帯びた暗褐色土  
10~13層はSK025埋土

- 土層2**
- 1 黒色粘質土
  - 2 鳥糞ローム盛りの暗褐色土(しまりなし)
  - 3 暗褐色土
  - 4 やや茶味を帯びた黒褐色土(鳥糞ローム粒含む)
  - 5 黑褐色土(鳥糞ローム粒含む)
  - 6 暗褐色土(鳥糞ローム粒含む)
  - 7 6層よりやや盛る
  - 8 茶褐色土(鳥糞ロームブロックを含む)



第28図 SK019及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)

部であろうか。

**S K013** (第27図)

調査区南側で検出し、東側を調査区外に延ばす土坑である。平面は不整形で、断面は南側に一段平坦面を有し、北側が深く掘り込まれている。埋土は上下2層に分かれ、上層は鈍い橙色、下層は厚さ10cm程度の黒色土が張り方外周～底部にかけて堆積している。出土遺物はなく、木根状の痕跡の可能性も考えられる。

**S K017** (第27図、写真45)

調査区南側で検出し、南側を搅乱によって失っている。S K018との前後関係は不明である。東西長1m、南北長0.55m以上を測る。断面形状は西側に平坦面を有し、東側が深く掘り込まれている。最も深い部分で、検出面からの深さは60cm程度となっている。また北壁には抉りこみが認められる。本来は更に南側に伸び、長方形プランを呈すると考えられる。埋土は黒色土で、出土遺物はない。

**S K018** (第27図、写真45・46)

調査区南側で検出する。S K017と切り合うが、前後関係は明らかではない。一辺80cm前後の割丸方形を呈し、検出面からの深さは50cmである。出土遺物はなく時期は不明である。

**S K019** (第28図、写真47～50)

調査区南側で検出した不整形の土坑である。K022・023と切り合うが、先後関係は明らかではない。底面形状も不整形で、東側底部では長方形土坑状のS K025を確認している。埋土はローム粒を含んだ黒褐色土を主体としている。遺物は小破片のみであるが、コンテナ1箱分出土しており、赤色顔料を塗布した土器破片も認められる。弥生時代中期後半～末頃に位置付けられる。

出土遺物 (第28図) 56・57は「く」字状に屈曲する甕の口縁部破片である。56は調整は内外面ナデを行う。胎土は精良で砂粒は少なく、色調橙色を呈する。57は口縁部が内側に張り出しが有する。1mm前後の砂粒を多く含み、にぶい橙色を呈する。58・59は高杯である。共に器表面の大半が削落している。58は外面の丹塗りが僅かに認められる。筒部外面には縦方向の磨きが行われている。59は顔料の塗布は不明である。杯部～筒部外面・内面に僅かに刷毛目が残っている。

**S K021** (第29図)

調査区南側で検出し、長軸1m、短軸0.9mを測る。掘り方は3箇所に平坦面を有し、中央部が最も深く掘り込まれる。また底面には平面径10cm、深さ10cm程の掘りこみが残る。埋土は黒色土～黒褐色土で、出土遺物は小破片10点程度で、弥生時代中期後半前後であろうか。

**S K025** (第29図、写真51)

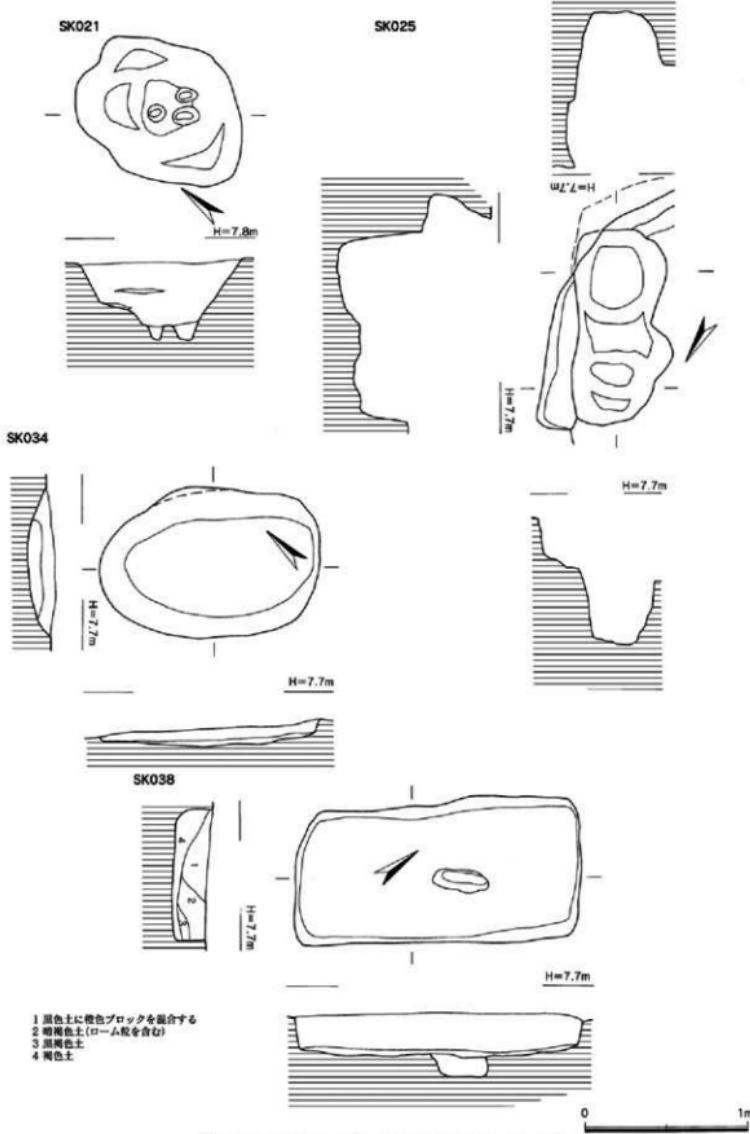
調査区南側、S K019の底面で検出する。長さ1.2mの平面略長方形を呈する。土坑中央部がやや高くなり、その両側が深く掘り込まれている。土層図 (S K019土層図参照) からS K019に先行するものと考えられる。出土遺物はなく詳細な時期は不明である。

**S K034** (第29図、写真52)

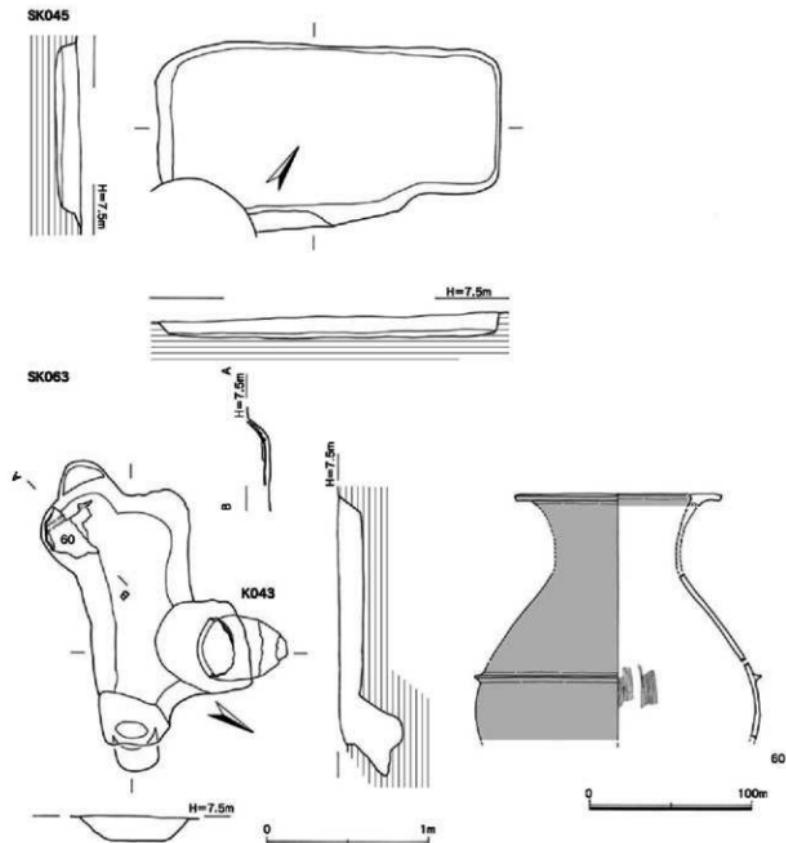
調査区中央部で検出する。長軸1.3m、短軸0.9mの平面長円形に近い形となる。横断面浅皿状を呈し、底面は緩やかに中央部がくぼんでいる。埋土はロームブロックを含んだ黒色土で、出土遺物はなく、時期は不明である。

**S K038** (第29図、写真53・54)

調査区中央部で検出する。長軸1.75m、短軸0.9mを測り、平面は均整の取れた長方形を呈する。主軸方位はN-36°-Eにとる。壁は深さ20cmを測り、ほぼ直立して掘削されている。床面は平坦で、中央部分に1箇所掘り込みを有する。S K045同様の埋葬構造であろう。弥生時代のものと考え



第29図 S K021・025・034・038実測図 (1/30)



第30図 SK045・063及び出土遺物実測図(1/30, 1/3)

られる小片が3点出土するのみで、詳細な時期は不明である。

#### S K045 (第30図、写真55)

調査区北側で検出し、SK045→K029の関係となる。長軸2.1m、短軸1.8~2.3mを測り、南側の長壁は屈曲しているものの、平面は長方形を意図したものとなっている。主軸方位はN-75°—E. にとる。壁は深さ15cmを測り、ほぼ直立し、床面は平坦となる。埋土はにぶい白色ロームブロックを含む黒褐色土である。埋葬構造の可能性が考えられるが、遺物は出土しておらず、時期は不明である。

#### S K063 (第30図、写真56)

調査区中央部で検出した。長さ1.5m程度、幅0.7m、深さ15cmの隅丸長方形土坑で、東側小口部

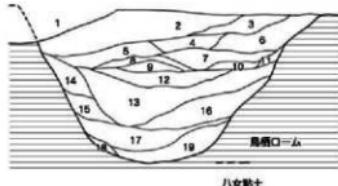
## SD001 土層

A \_\_\_\_\_ B  
H=8.0m

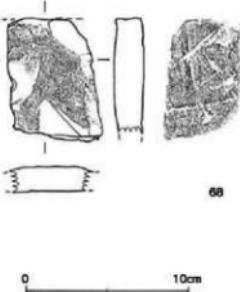
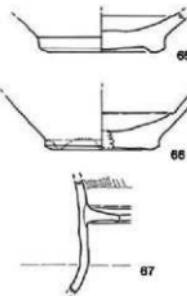
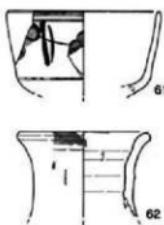
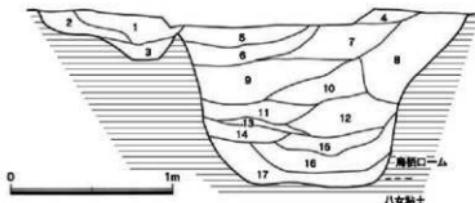
土層



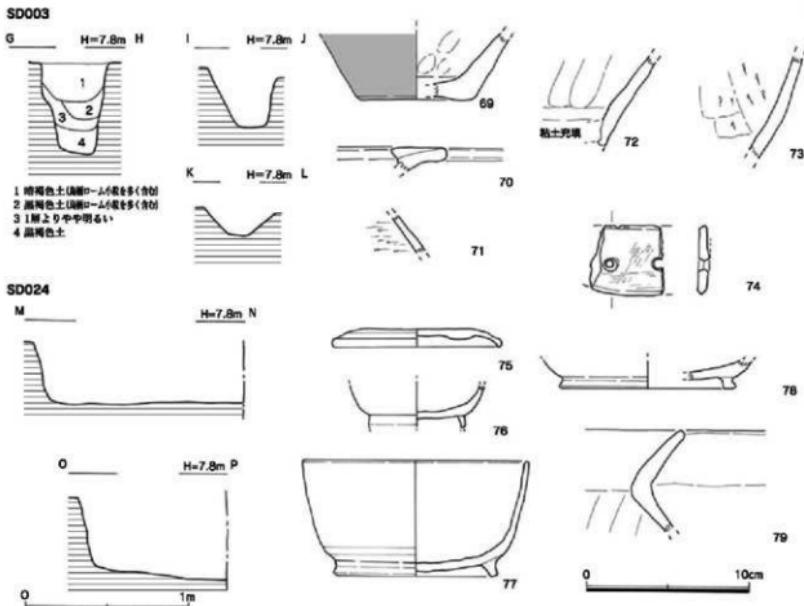
## SD002 土層1

C \_\_\_\_\_ D  
H=7.7m

## SD002 土層2

E \_\_\_\_\_ F  
H=7.7m

第31図 SD001・002上層図及び出土遺物実測図（1/30、1/3）



第32図 S D003・024断面図及び出土遺物実測図 (1/30, 1/3)

分には掘り込みを有する。北側でK043と切りあうが、先後関係は不明である。主軸方向はおおよそN—77°—Eにとる。また西側で丹塗りの壺を確認しているが、これもこの上坑との関係は不明である。その他には遺物は出土していない。

**出土遺物 (第30図)** 60は西側で確認した丹塗りの壺で、部分的に残存しているのみである。口縁部は断面錐状を呈し、胴部には1条の突帯を貼り付ける。外面及び口縁部内面に赤色顔料を施している。また胴部内面の一部には縦方向の刷毛目が残っている。

### 3) 溝

#### S D001 (第31図、写真57・58)

調査区南隅～南西側壁際で検出する。本米水田造成に伴う削平と考えられ、これを埋め立てたものであろう。開削の時期は不明であるが、その方向から考えて第64次調査で確認した段落ちにつながるものと考えられる。丘陵の傾斜線辺の形状に沿って耕作地を広げたものと考えられる。この段落ちの埋め立てはアサヒビール工場建設に伴って行われたものであろう。

#### S D002 (第31図、写真59～64)

調査区南側で検出する。調査区南端より北側に延び、中央付近で東側に屈曲している。第16次調査検出のS D-02につながるものと考えられる。また切り合い中最も新しいもので、多くの甕棺墓・土坑を切っている。溝幅は1.5～2.5m、検出面からの深さは0.5～1.2mを測り、断面形状はほ

は逆台形である。溝底は断面形がやや丸みを帯び、北半分が深く掘削されている。埋土は上層と下層に分けることができ、上層は暗褐色土を主体とした埋土である。また下層は水分が多く含み粘性の強い黒色土が主体となる。土層観察からは最低1回の溝の掘り直しか確認できた。コンテナ8箱の遺物が出土したが、そのうち6箱は甕棺破片である。その他弥生時代～中世の遺物のほか、染付が1点出土している。中世後半～近世の溝と考えられ、環濠状となり居宅等を閉む可能性が考えられる。

出土遺物（第31図） 61は染付小碗である。62は陶器瓶の口縁部である。63は青磁皿の口縁部。64は青磁碗である。高台内面まで施釉し、内底面に花文をスタンプする。65・66は白磁碗である。67は瓦質土器の火舍である。68は橙色を呈する平瓦である。凹面には布目、凸面にはヘラ状工具によるナデ調整が行われている。

#### S D003（第32図、写真65～69）

調査区南側で検出し、主軸方位をおおよそN-31°-Eにとる。K016とS D024に切られる。溝幅は45cm程度で、検出面からの深さは、深いところで60cm程度となり、北側に向かって浅くなっている。K016との切り合い部分の北側より、自然に立ち上がりしていく。また底部には凹凸があるが、流水の痕跡は認められない。南側では深さ80cmの柱穴状の掘り込みも認められる（写真68）、溝との関連は不明である。この溝は第16次調査SD-37に並行し、北側延長部分が第15次調査で確認されている。この並列溝は比恵・那珂遺跡群を南北に貫く溝として断続的に確認されており、いずれの地点でも出土遺物から弥生時代終末～古墳時代初頭前後に位置付けられている。しかしながら今回の調査区では弥生時代中期後半～後期初頭に位置付けられるK016と切り合い関係を有し、平面的にはこれに切られている状況であった。上甕の残存状況からみても、SD003と切り合う南北両側において溝底よりも上甕のほうのレベルが高くなっており、溝の掘削中に甕に当たったため、これを避けて溝を掘り下げたという解釈も難しいようである。出土遺物を見ると小破片が20点ほど出土するのみで、いずれも基礎搅乱より南側からの出土である。時期的には弥生時代中期後半前後に位置付けられる遺物のほか、古墳時代初頭前後～後半以降の遺物が数点認められ、平面上の先後関係とは異なる時期の遺物も含まれている。このような状況から今回の調査においては、SD003は弥生時代中期後半前後に位置付けられるものとし、この際この並列溝については、部分的に弥生時代中期後半前後に掘削されていた可能性について考えておきたい。今回の調査のみでは疑問の残る点もあり、今後の周辺での調査事例の増加に託したい。

出土遺物（第32図 69～74） 69は丹塗りの甕底部である。70は錐状を呈する口縁部である。71は薄手の甕胴部である。色調灰黄色を呈し、内面へラ削り、外側ナデを行う。布留甕であろうか。72は明橙色の底部破片である。内面に粘土充填の痕跡が残る。内面指ナデ、外側ナデによる。73は内面へラ削りを行う胴部破片である。74は小豆色凝灰岩甕の石包丁である。孔芯間で3cmを測る。

#### S D024（第32図、写真70）

調査区南端部分で検出し、主軸方位をおおよそN-84°-Eにとる。埋土はロームブロックを含む暗褐色土である。第16次調査SD-50の延長に当たるものと考えられ、幅1.5m前後で逆台形断面を呈する溝の底部が残っているものと考えられる。おおよそ7世紀後半～8世紀初頭に位置付けられ、土師器・須恵器・瓦破片が出土している。

出土遺物（第32図 75～79） 75～78は須恵器である。75は天井部外面に回転ヘラ削りを有する蓋である。76～78の杯はいずれも外底面は回転ヘラ削りを行う。76は小形品で高台は細く高い。77は高台を屈曲部より斜めに貼り付けている。78は高台部の外側が喇叭状に張り出す。79は土師器甕である。胴部内面にはヘラ削りを行う。



写真1 調査地点より南東方向を望む（中央は那珂八幡古墳）



写真2 調査区南側全景（北西から）



写真3 調査区中央部全景（北西から）



写真4 調査区南側全景（北西から）



写真5 K004 (北から)



写真6 K006 (北から)



写真7 K007 (南から)



写真8 K008 (東から)



写真9 K009 (南から)



写真10 K010 (南から)



写真11 K011 (西から)



写真12 K012 (南から)

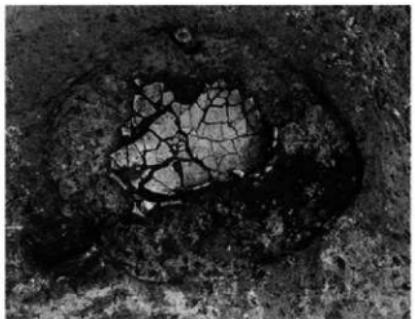


写真13 K014 (南から)



写真14 K015 (南から)



写真15 K016 (北から)



写真16 K016内土層



写真17 K022（西から）

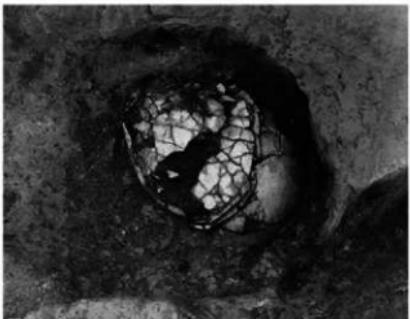


写真18 K023（西から）



写真19 K026（南から）



写真20 K027（南から）

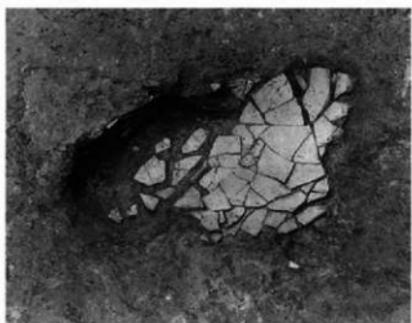


写真21 K028（南から）



写真22 K029（南から）

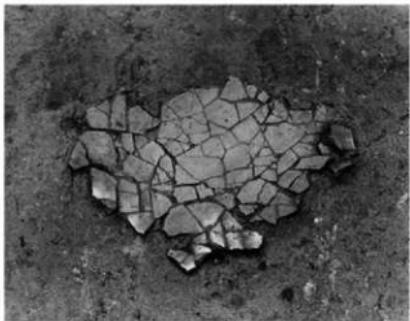


写真23 K030 (南から)



写真24 K031 (南から)

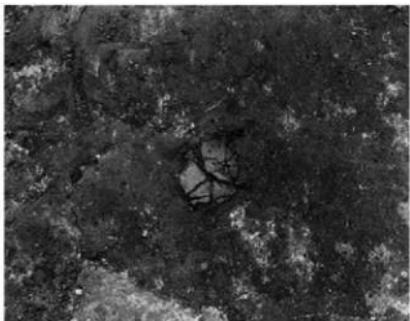


写真25 K032 (南から)

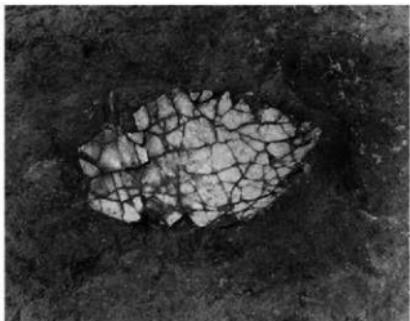


写真26 K033 (南から)

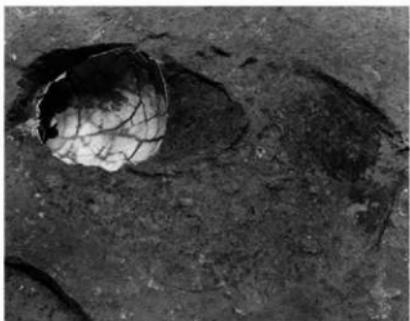


写真27 K035 (西から)



写真28 K036 (東から)

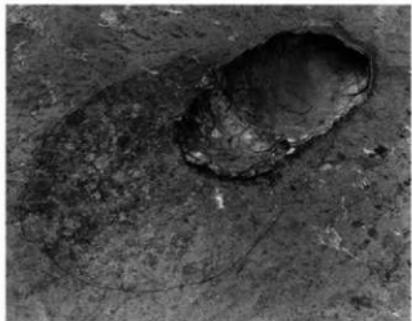


写真29 K037 (南から)

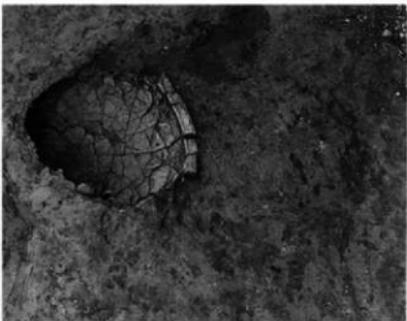


写真30 K039 (北から)

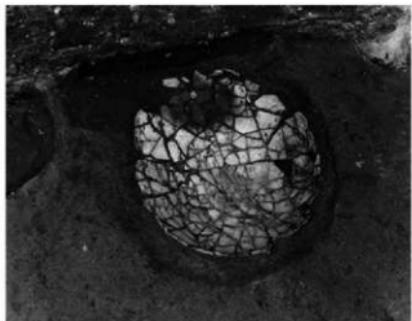


写真31 K040 (東から)



写真32 K041 (南西から)



写真33 K042 (東から)

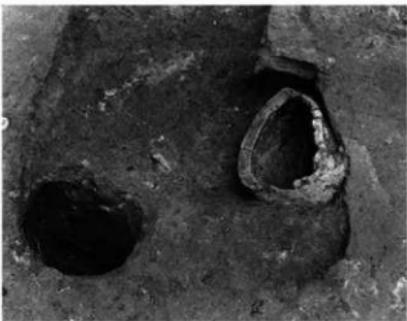


写真34 K043 (東から)

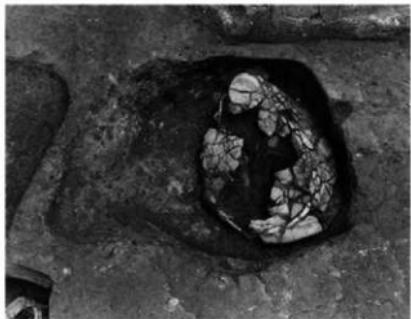


写真35 K044 (東から)

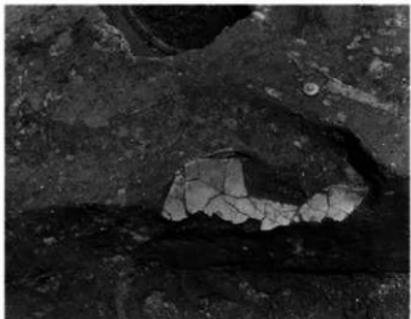


写真36 K046 (西から)



写真37 K047 (北から)



写真38 K048 (北から)



写真39 K049 (北から)



写真40 K050 (東から)

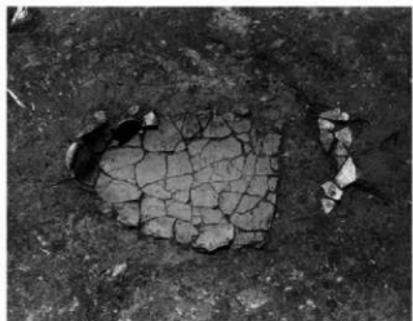


写真41 K056（北から）



写真42 K057（東から）

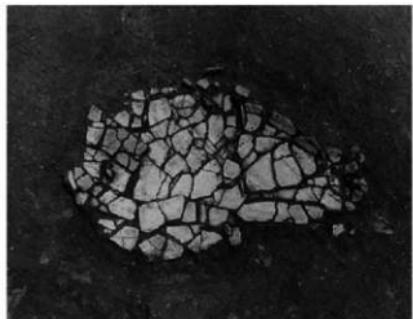


写真43 K058（北から）

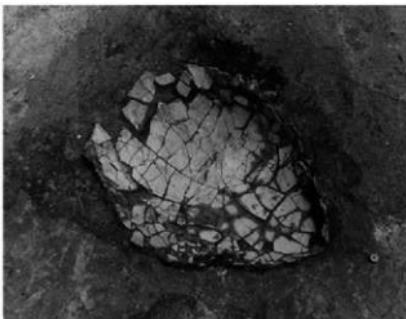


写真44 K059（北から）

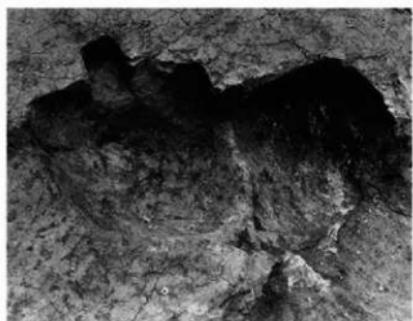


写真45 SK017-018（西から）



写真46 SK018上層



写真47 SK019(北から)



写真48 SK019(東から)

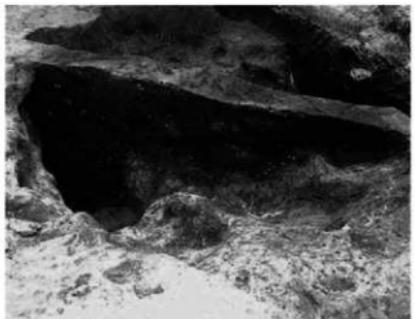


写真49 SK019上層1



写真50 SK019上層2



写真51 SK025(北から)

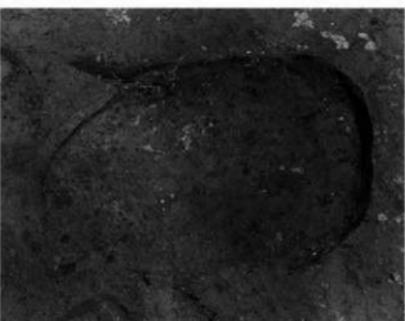


写真52 SK034(西から)

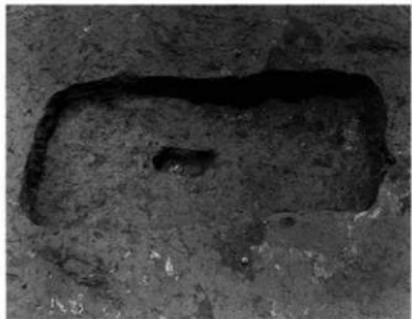


写真53 SK038（北西から）



写真54 SK038上層



写真55 SK045（南東から）



写真56 SK063（東から）



写真57 SD001（西から）



写真58 SD001上層



写真59 SD002南半（北西から）



写真60 SD002南半（南東から）



写真61 SD002北側コーナー部（西から）



写真62 SD002北側コーナー部（東から）

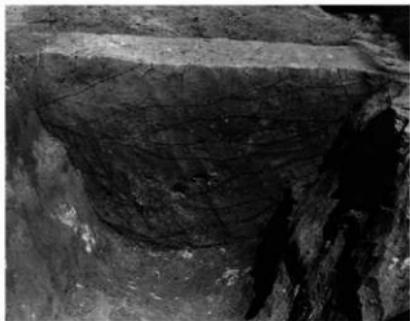


写真63 SD002上層1



写真64 SD002上層2



写真65 SD003 (南東から)



写真66 SD003 (北西から)

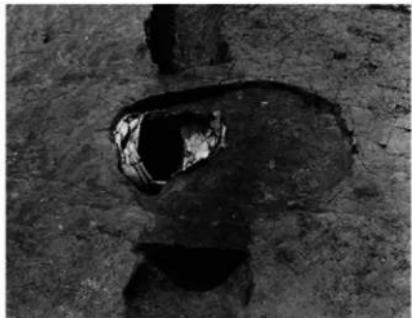


写真67 SD003・K016 (北西から)

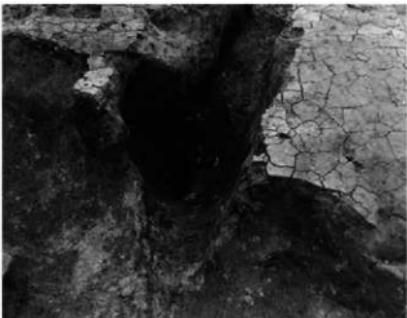


写真68 SD003内ピット状掘り方 (南から)



写真69 SD003上層



写真70 SD024 (西から)

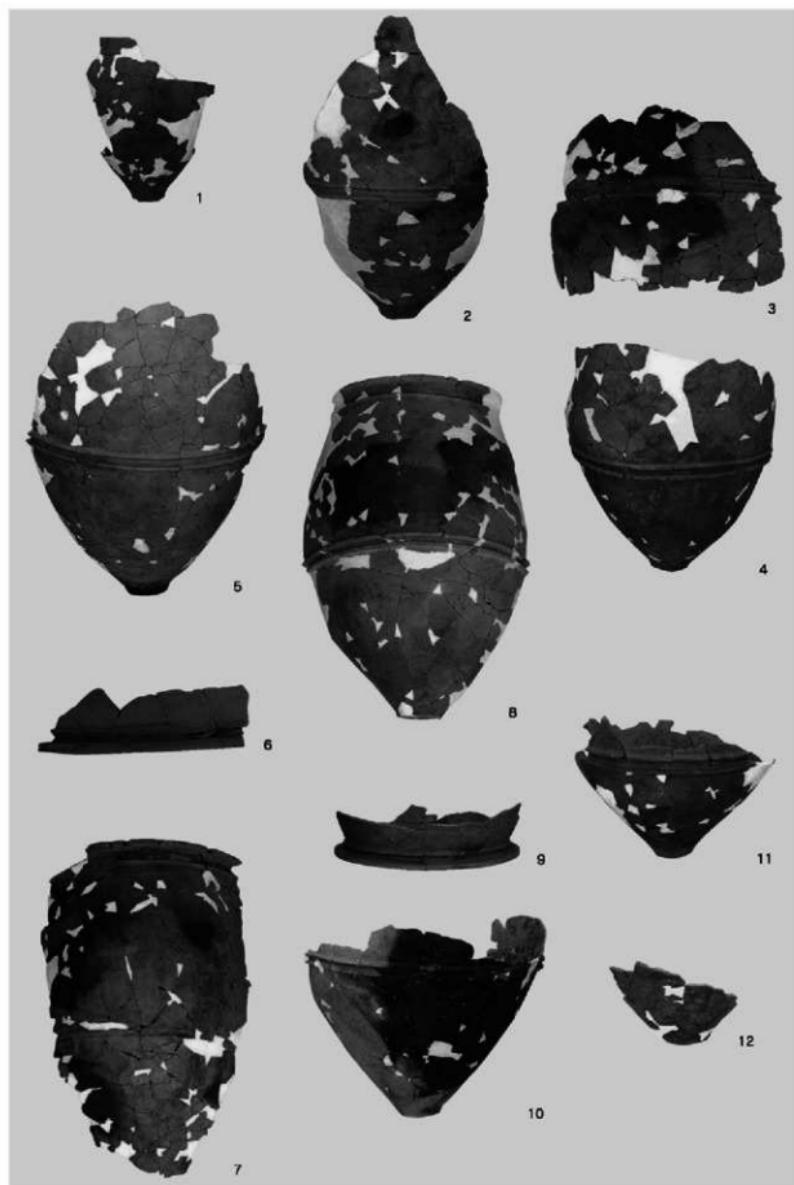


写真71 出土遺物 I

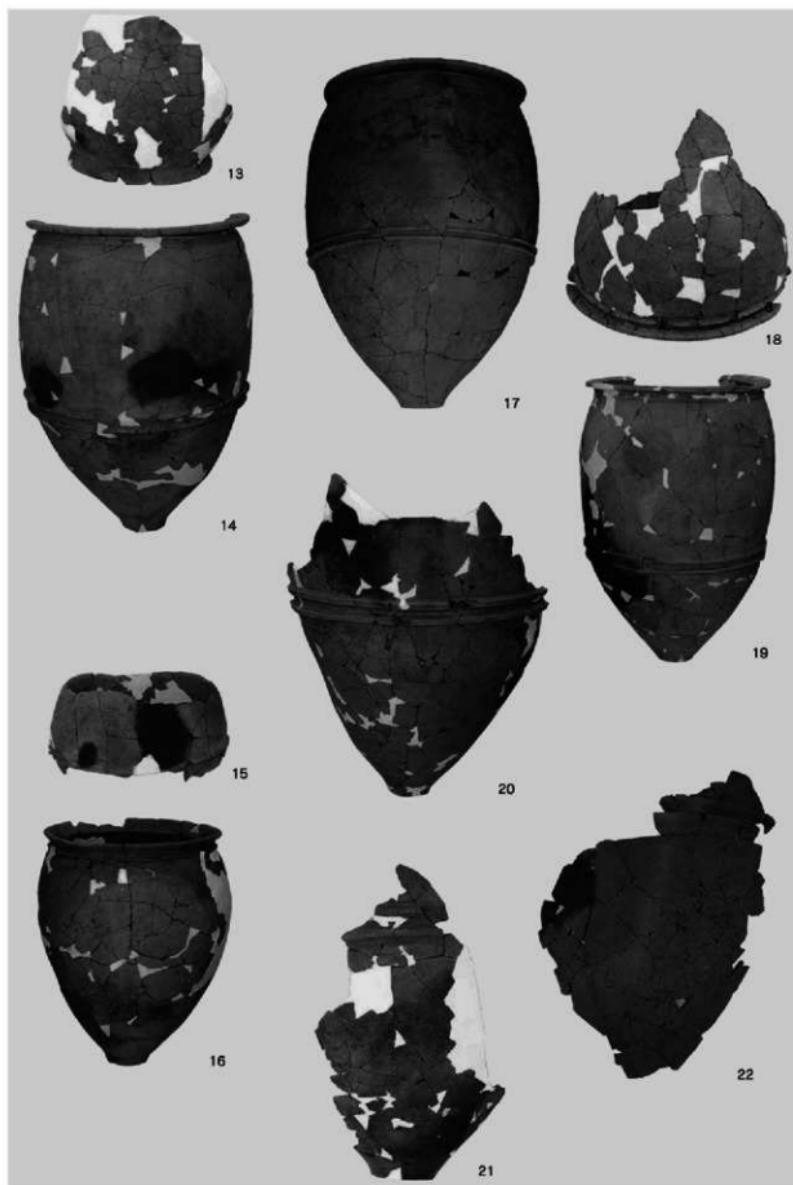


写真72 出土遺物2

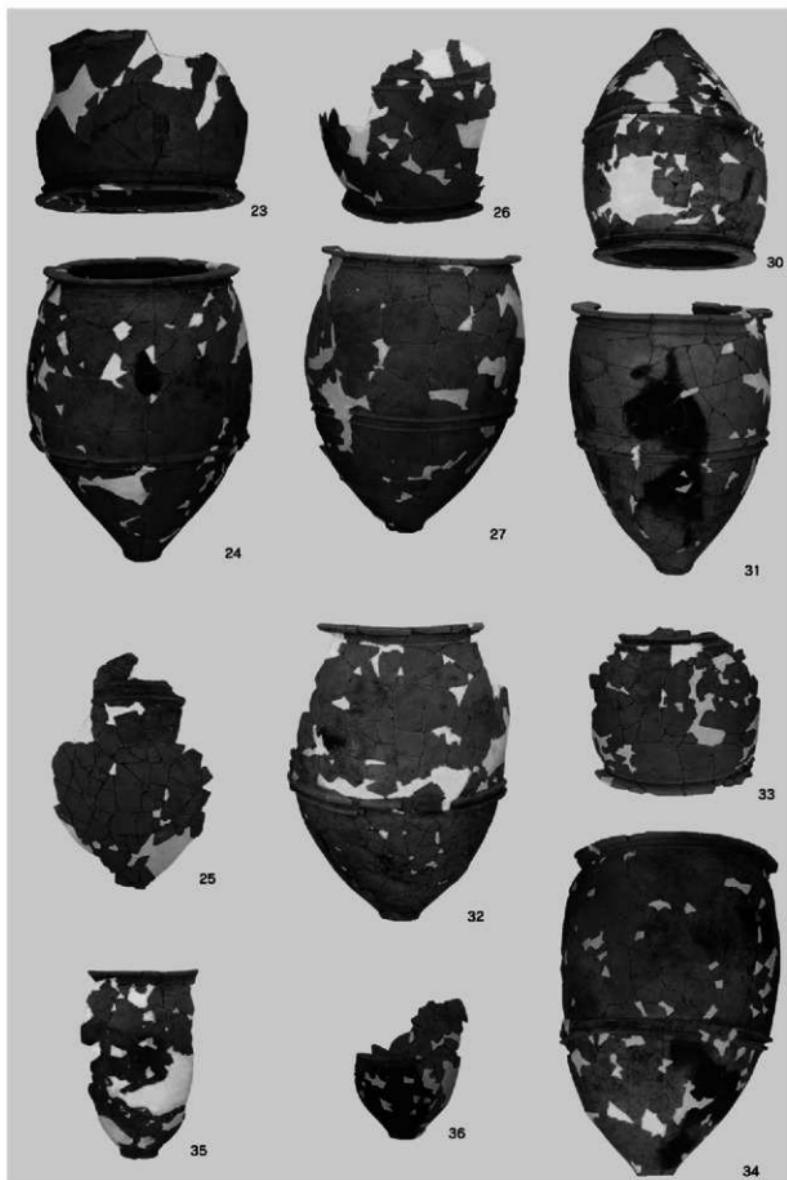


写真73 出土遺物3



写真74 出土遺物4

## 那珂遺跡群第108次調査報告

### I はじめに

#### 1 調査にいたる経過

平成16年8月20日付けでアサヒビル株式会社博多工場 工場長 秀島教文氏より福岡市教育委員会宛に福岡市博多区竹下3丁目1-1 アサヒビル株式会社博多工場内における、施設建設にかかる埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（事前審査番号16-2-519）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群（分布地図番号37-0085・遺跡略号NAK）に含まれている。対象地點は大正10年（1921年）に建設されたレンガ棟の跡地である。本レンガ棟は工場のシンボルとして親しまれた建造物であったが、諸般の事情から平成16年6月に解体されたところである。また本地点の北～西側では第50次・64次調査、南側では第10次調査が行われており、その結果から本地点が丘陵内に開拓された谷部にあたることが推定された。埋蔵文化財課では平成16年11月9日に対象地の試掘調査を行った。その結果対象地北側は谷部湿地の中央部分に当たると想定され、遺構・遺物包含層は確認されなかった。また北端部分はレンガ棟の搅乱が深部にまで及んでいた。南側部分では現地表下2mの八女粘土層上面で土坑を確認した。この結果を受けて埋蔵文化財課では申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取り扱いについて協議を行った。協議の結果、建物の構造上遺構の破壊が避けられないため、申請地1800m<sup>2</sup>のうち南側194.32m<sup>2</sup>を対象として、平成16年度に発掘調査、平成17年度に資料整理・報告書作成を行い、記録保存を図ることで協議が成立したが、資料整理・報告書作成は18年度に繰越とした。

調査期間は平成17年3月8日～平成17年3月18日である（調査番号0490）。調査面積は454m<sup>2</sup>、出土遺物はコンテナ1箱分出土している。

現地での発掘調査にあたってはアサヒビル株式会社博多工場の関係の皆様から発掘調査についてご理解頂くと共に、多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

#### 2 調査体制

事業主体 アサヒビル株式会社博多工場（現：埋蔵文化財第1課）

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査総括 平成16年度（発掘調査）

埋蔵文課課長 山口譲治 調査第2係長 池崎謙二

平成18年度（整理・報告書作成）

埋蔵文化財第1課長 山口譲治 調査係長 山崎龍雄

調査庶務 平成16年度（発掘調査）

文化財整備課 御手洗清

平成18年度（整理・報告書作成）

文化財管理課 鈴木由喜

調査担当 埋蔵文化財課 調査第2係 長家伸

調査作業 澄川アキヨ 中村フミ子 岩本三重子 越智信孝 藤野トシ子 中村サツエ

藤野幾志 西川シズ子 宮崎幸子 衣野孝子 中島道夫

整理作業 石谷香代子 太田次子 星野明子 樋口久子

## II 調査の記録

### 1 調査の経過

調査対象地点は現状でレンガ棟解体のままで未舗装の平地となり、標高は7.9m前後を測る。対象地は自然の谷地形を耕作地化した後に、近・現代に造成したものと考えられる地点である。

調査は重機による表土の除去から行った。この際調査廃土を場内処理する必要から当初南側にT字形の調査区を設定し、この後土砂反転を行って北側に調査区を拡張した。そのため結果的にT字形の調査区となっている。遺構面は搅乱を大きく受けしており、遺構面の残存状態は不良であった。遺構面は南端部分でかろうじて鳥栖ローム層が認められ、標高は6.35mである。またこの直上には厚さ20cm程度の耕作土が確認されている。この北側では遺構面は標高5.25~5.8mの八女粘土層となり、北側に向かって緩やかに傾斜しているようである。この部分では八女粘土層の上面、標高6.2~5.8mに最低4枚の耕作土が認められ、この下には八女粘土層との間に厚さ30cm程度の均質な黒色土が堆積している。この黒色土は谷部に堆積した泥土と考えられるが、遺物はなく、堆積時期は不明である。

前述のように遺構面の搅乱が著しく、遺存状態が極めて不良であったためもあり、明確な遺構は確認されていない。ただ一部木根及び浅いくぼみより遺物が出土するのみである。

### 2 遺構と遺物

#### 1) 出土遺物

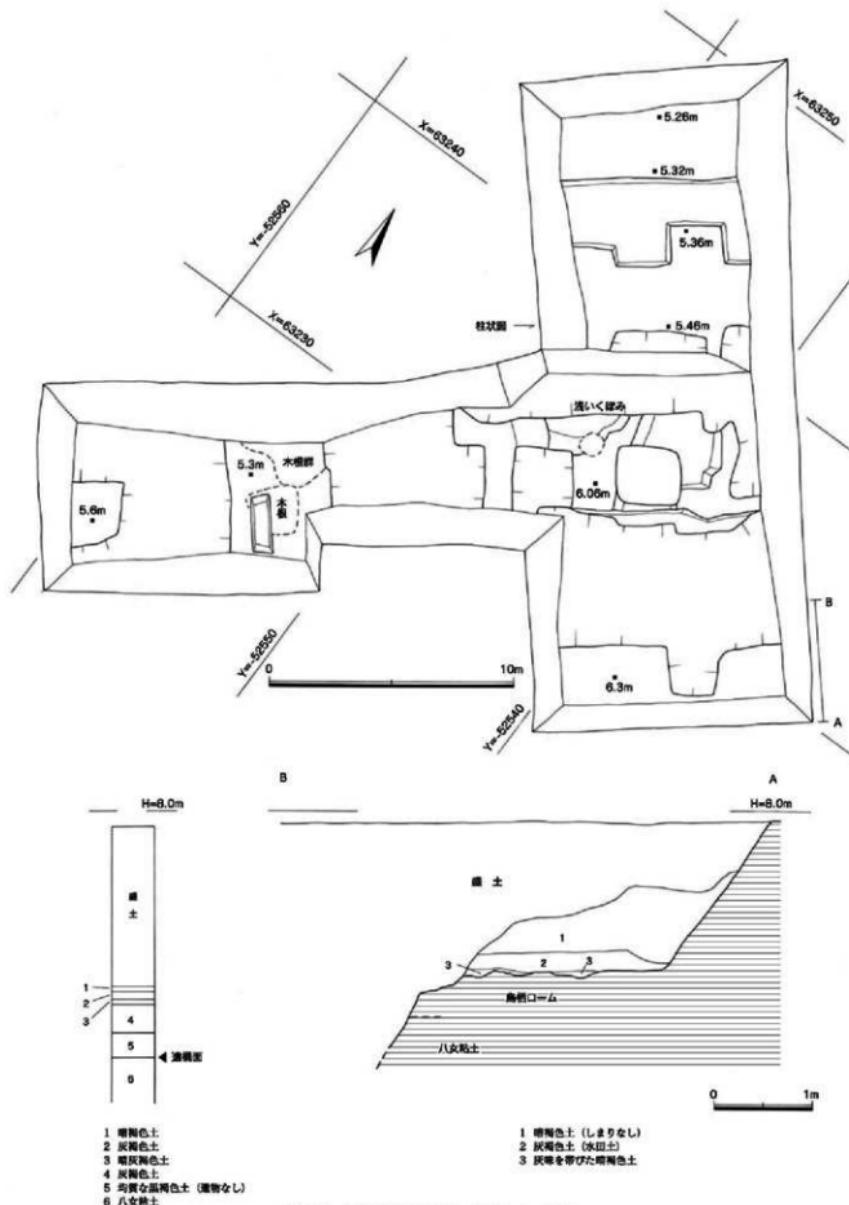
遺物はコンテナ1箱分しか出土していない。遺物が出土したのは調査区西側で確認した木根群と、東側中央で確認した浅いくぼみからである。木根群はピット状の掘り込みとなり、埋土は黒灰色土と八女粘土ブロックの混合土である。また東側のくぼみは人為的なものではなく、最大深さ5cmを測り、埋土は黒色土である。

80~94は木根出土遺物であり、いずれも弥生時代中期に位置付けられるものである。80~86は甕の口縁部である。80は口縁部が喇叭状に短く折れ曲がり、口縁部上面は外傾している。内外面ナデ調整を行い、色調は灰黄色を呈する。81~86は断面逆L字状の口縁部を有する。口縁部上面はほぼ水平となり、内側に僅かに張り出しを有する。87~88は丹塗り広口壺の口縁部であろう。共に胎土は精良で砂粒の混入は少ない。88には痕跡的に縱方向の暗文風の磨きが残っている。89は錐状口縁を有する壺である。器面の剥落が進み調整等は不明瞭である。90は頸部の破片である。器面は摩滅している。91~93は平底の底部である。91~92は外底面が僅かに上げ底状となっている。また91の外面には継刷毛が行われている。94は灰色凝灰岩製の石包丁である。

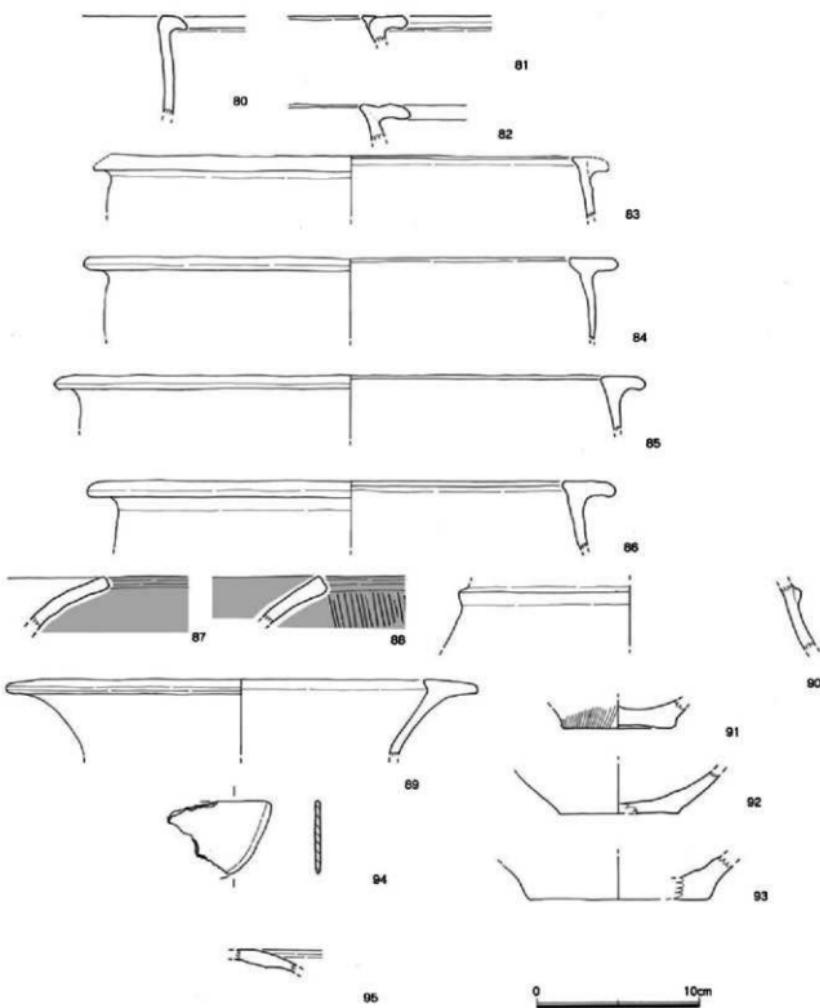
95は東側くぼみ中より出土した須恵器壺蓋である。天井部外面には回転ヘラ削りを行う。

#### 2) 小結

今回の調査地点は丘陵上に解析された谷部に位置し、水田開発による造成を受けている上に、工場施設による搅乱が著しく、遺構・遺物共に遺存状態はきわめて不良であった。遺構については人為的なものは認められず、遺物も木根及び自然地形の埋み中から出土したものである。時期的には弥生時代中期後半及び古墳時代後期の遺物が少量出土するのみであるが、中でも弥生時代中期後半の遺物がそのうちの大半を占めている。これは周辺の状況を反映したものといえ、弥生時代の生活・埋葬遺構が周辺に集中していることと符合するものである。今後更にきめの細かい調査を行うことによって、各時期の集落景観が明らかになることを期待したい。



第33図 調査区全体図 (1/200, 1/50)



第34図 出土遺物実測図 (1/3)



写真75 調査区南側全景（東から）



写真76 調査区北側全景（南から）



写真77 調査区南東隅土層

書名ふりがな なかよんじゅうご  
書名 那珂45  
巻名 那珂遺跡群第100・108次調査報告  
巻次  
シリーズ名 福岡市埋蔵文化財調査報告書  
シリーズ番号 第935集  
編監者名 長家伸  
編集機関 福岡市教育委員会  
発行機関 福岡市教育委員会  
発行年月日 20070330  
作成法人ID  
郵便番号 810-8621  
電話番号 092-711-4667  
住所 福岡市中央区天神1-8-1  
遺跡名ふりがな なかいせきぐん  
遺跡名 那珂遺跡群  
所在地ふりがな ふくおかしはかたくたけした3ちょうめ1の1  
遺跡所在地 福岡市博多区竹下3丁目1-1  
市町村コード 40132  
遺跡番号 37-0085  
北緯 33° 33' 22" (100次) 33° 34' 20" (108次)  
東経 130° 26' 0" (100次) 130° 25' 53" (108次)  
調査期間 20040601~20040730(100次)、20050308~20050318(108次)  
調査原因 工場内施設建設  
種別 集落  
主な時代 弥生時代  
遺跡概要 弥生時代 墓柏墓、土坑墓、土坑、溝 古代 溝、中世 溝  
特記事項

## 福岡市埋蔵文化財調査報告書第935集

## 那珂45

-那珂遺跡群第100・108次調査報告-

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8-1  
2007年(平成19年)3月30日  
092(711)4667

印刷 江口印刷株式会社  
福岡市南区大橋2-22-8

